

第1章	みずから学ぶ大学の歴史と建学の精神	4
第2章	アカデミック・リテラシー —大学で何を学ぶか？いかに学ぶか？—	16
第3章	大学で学ぶ意識と意義	22
第4章	ノートのまとめかた	32
第5章	レポート作成に関する10のアドバイス	36
第6章	授業における他者理解と自己表現	44
第7章	キャリアデザインと大学の学び	52
第8章	教育開発推進機構による教育力向上の支援と修学サポート	62
第9章	SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）との上手なつきあい方 —トラブル・事件を避けるために—	66
	新入生のための用語集	68

近年、大学教育における導入教育あるいは初年次教育の必要性がさげばれています。その背景にはマスプロ教育からユニバーサル・アクセスの時代に突入した大学大衆化の進展、教師・学生間の関係性の変容、社会における大学の位置づけの変化、などの動向が挙げられます。

従前では、大学へ入学するということが、大きな変化の時代として位置づけられてきていました。欧米でも、「teensの大切さ」として、人生における一大変革期という認識がよく、大学に入ること自体がある種おとなの自覚を持つ大きな契機となりました。しかし、近年わが国においてはそうした「変化の時代」認識は希薄で、進学自体がある種の通過儀礼とみなされています。

また、教師・学生間の関係性については、教員のもつ「教員文化」の、これも年齢や経験によって一様ではありませんが、「学生文化」との隔絶が近年とみに際だっているようにみられます。教員がみずからの学生時代の生活をもとにした価値観や規範性をもつだけで、学生との交流を図らなければ、それはますます乖離してしまうに違いありません。

さらに大学を取り巻く環境は、従来の研究中心型から「教育の場」へと大きく変貌してきていることを自覚しなければならなくなっています。

こうした激変する大学環境に即応し、より効果的な教育を図るには、中等教育と高等教育の接続を視野に入れて、いかに学生を大学に受け入れるか、そして円滑に大学教育になじませてゆくかに配慮したプログラムをもつことが求められます。わたくしがすでに公表しました「教学に関する基本施策」において、全専任教員が入り口と出口に責任を持ち、導入教育に当たるべきであると申し上げたのも、かかる現状認識があったからであります。

しかし、ただちにそうしたプログラムを立ち上げてゆくにはさらなる議論が必要であるとの判断をいたしました。そこで、教務部にお願ひし、まずできるところから始めようという決意のもと、『國學院大學導入教育ハンドブック』を作成した次第です。今後、全学的かつ共通科目的な導入教育をめざし、さらなるプログラムの検証と授業化に向けて検討を進めてまいる所存でございます。



## 「はじめの一步」について

教育開発推進機構長 柴崎 和夫

このハンドブック「はじめの一步」は、國學院大學における導入教育（初年次教育）で使用することを念頭に編集しています。國學院大學での導入教育（初年次教育）科目は、主に各学部・学科の専門教育科目の一つとして実施されています。それら新入生に対する導入教育（初年次教育）において、國學院大學としてすべての新入生に共通して学び・理解してほしい事柄を、このハンドブック「はじめの一步」としてまとめました。

高校までの学習と、大学に入学してからの学び（学修）には大きな違いがあります。端的にいうと、受け身の学習から自らの選択による学修への変化、と表現できます。それは「自己責任」という言葉で代表されます。しかし、現実には大学不適應の症状を示す学生が、少なからず存在しています。その理由は様々です。不本意入学で、そもそも最初からやる気が起こらないという学生、学力に不安を抱えていて授業について行けない（ノートもとれない、教員の言っていることが理解できないなど）学生、人と人との対面コミュニケーションがうまくとれず引きこもりがちになる学生等々、一人一人には個別の理由があります。私たち大学教職員一同は、そのような学生が落ちこぼれでも、特別でもないということを、理解しています。

学生の皆さんを、大学の責任で受け入れているのですから、できる限り丁寧に、一人一人の問題を座視すること無く対処する必要があると考えています。導入教育は、教員一人一人が学生と向き合いながら、新入生が一人の「**大学生**」となる手伝いをする非常に大切な場です。学士課程教育の充実、社会人力の育成、など大学、皆さんに求められている事柄は、どれも一朝一夕で達成できるものではありません。けれども、千里の道も一歩からです。私たちは、導入教育の場で、学生の皆さんと真摯に向き合うことから始めたいと考え、そのときに役立つようこの冊子を作りました。

このハンドブックは、多くの方々のご協力を得て作られました。しかし、これが完成形というわけではありません。社会の状況の変化に対応して、入学してくる学生のありかたもまた、刻々と変化しています。國學院大學として何を提供すべきか、不断の検証が欠かせません。それには、このテキストを使う教員、そして学生の意見が大変重要です。お気づきの点がありましたら、遠慮無くそのご意見を教務部にお寄せいただきたいと思います。

國學院大學の学生として、4学年を通して学び誇るべき学風と伝統を身につけて卒業できるように、まずはわたしたちの大學のことを、より深く知ってほしいと思います。國學院大學が皆さんの輝かしい人生にとって、確かな心の拠り所となることを願っています。

## 1 身のまわりのことから考えてみよう！

### 1 現代日本社会の実像と虚像

國學院大學は平成24年に創立130周年を迎えました。その長い歴史は、わが国の近現代の歩みでもあります。そして、現代はグローバル化やIT化の急速な進展、携帯電話・パソコンの普及など、とても便利で豊かな時代になりました。しかし、連日ニュースで報道されているように、頻発する狂気的な殺人事件、企業や官公庁・教育界における組織的な犯罪行為、いじめによる自殺問題などなど、現代日本社会は倫理観や道徳観が失われて、社会的病理現象に侵されているとも言えましょう。

### 2 身近なところに

IT社会は簡単にさまざまな情報を得ることを可能にしましたが、氾濫する情報から真偽が見えにくくなり、インターネットではニュースでさえも興味本位に傾き、事実と宣伝を混在させ、ひいては現実と仮想の分別まで混乱させてしまっているようです。街や電車内・インターネットなど、いやおうなしに目に飛び込んでくるファッション広告、また、規制緩和による自由化は、あらゆる分野で利己主義に置き換えられてしまった感があります。

都会の暮らしや流行を追いかければ現代人、外国ブランドを身にまえば国際人、というわけではありません。氾濫する情報に踊らされることなく、皆さん自身の価値観で、「何が新しく生まれた美しいもので、何が失われてゆく大切なものなのか」をよく吟味することが必要です。さらに、実際に自分の眼で広く社会を見聞きしたり、多くの人びとと語り合って、世界にひとつしかない個性を磨いてください。学生時代はみずからの人生観を熟慮する絶好の機会なのです。

### 3 大学生として

振り返れば、学問と現実の違い、情報と事実とのズレ、日本と外国との差異などは、ごく身近なところにもたくさんあります。その中で、変えてはならない真実とは何か。一生を貫く立脚点はどこに置くべきか。移ろいゆく現象について眼が行きがちですが、グローバル化のなかで真の国際交流には、自国と他国の総理解が不可欠です。日本人は流行やブランド・イメージに非常に影響されやすく、かつ冷めやすいと言われていていますので、皆さんも注意が必要です。

では國學院の学生として、どのような大学生活を送るべきでしょうか。

### 4 昨今の日本に欠けているもの

近年、「日本人の品格・美風が地に墮ちた」と言われます。日本人は明治の開国以来、多くの外国人から賞賛されていました。すなわち、「勤勉」「親切で思いやりがある」「責任感が強い」「清潔で人も物も町も全てが整然としている」「教育熱心」「高い技術力」などです。今はどうでしょうか。

「現代日本社会は精神的に幼稚化している」「今の日本の若者は社会によって作り出された世代、大人の世界の反映」とする見解もあり、「人間をつくり育てることはどういうことなのか」、教育の根幹について、国や社会全体、大学での早急な対策が不可欠です。

### 5 過去を学んで今を知る

近年の日本の変化の要因は、一体どこにあるのでしょうか。くしくも現代日本の社会情勢には、國學院大學が生まれるべくして生まれた、明治の時代背景とも共通性があるので、日本を正常化して、子どもたちにも明るい未来を築いてゆくためには何が必要でしょうか。実はそのヒントが、國學院大學創立の背景と建学の精神に秘められているのです。

## 2 國學院大學の歴史

### 1 創立の時代背景

明治維新政府は、中央集権国家の確立や不平等条約の改正のために、進歩的な改革を押し進めましたが、世界の先進国に追いつくことを急ぐあまり、「鹿鳴館時代」に象徴される欧化万能の風潮が日本全土をおおいました。

しかしその間に、心ある人びとから「日本が独立した国家として発展するためには、西

欧文明の無批判的な模倣ではなく、日本古来の思想や文物・民族性に基づく国づくりが必要である。」という声が聞かれるようになりました。このような反省の気運を背景として創設されたのが、國學院大學の母体となる「皇典講究所」なのです。

## 2 「建学の精神」ここに生まれる

明治15年（1882）11月4日、「皇典講究所」の開校式に臨んだ有栖川宮熈仁親王は、初代総裁として教職員・生徒に対して、次の「告諭」を述べられました。

「凡<sup>オヨソ</sup>学問ノ道ハ本<sup>モト</sup>ヲ立ツルヨリ大ナルハ莫シ、  
故<sup>ユエ</sup>ニ国体ヲ講明シテ以テ立国ノ基礎<sup>カタ</sup>ヲ鞏クシ、  
徳性<sup>カンヨウ</sup>ヲ涵養シテ以テ人生ノ本分<sup>ツク</sup>ヲ尽スハ百世<sup>ヒヤクセカ</sup>易フベカラザル典則ナリ、  
而<sup>シカ</sup>シテ世<sup>ヨ</sup>或<sup>アル</sup>ハ此ニ暗シ、  
是<sup>コ</sup>レ本<sup>ホンコウ</sup>鬻<sup>コウ</sup>ノ設立<sup>ユエン</sup>ヲ要スル所以ナリ、  
今ヨリ後、職員生徒<sup>コ</sup>此ノ意ヲ体シ、  
夙<sup>シユク</sup>夜<sup>ヤ</sup>懈<sup>オコタ</sup>ルコト無ク、  
本<sup>ホンコウ</sup>鬻<sup>リウショウ</sup>ノ隆昌<sup>リウショウ</sup>ヲ永遠<sup>ユウエン</sup>ニ期セヨ」

## 3 「建学の精神」について

國學院大學の「建学の精神」は、この「告諭」の「本ヲ立ツル」ことを基底としています。すなわち「根本を究める」ことが大事だということです。そのためには、「国体の講明」と「徳性の涵養」が重要であると説きます。

「国体の講明」とは、日本固有の国柄や国民性を研究すること。具体的には、日本の文化・文学・歴史・神道・哲学・政治・経済・法律などの研究を通して、「日本のアイデンティティー」を探求することと言えます。国際交流が必須となった現代においても、日本とはどういう国なのか、日本人の生き方などについて知ることが、より大前提となります。そのための教育・研究が國學院大學の基本的役割のひとつなのです。

「徳性の涵養」とは、日本人が持つ、敬い・慈しみ・慎み・感謝・思いやる心、といった国民性を継承し、立派な人格を形成して人生の大道（道義）を歩むことです。残念ながら戦後の高度経済成長期には、「消費は美德」とまで言われ、道徳的意識の重要性は軽視されました。しかし國學院大學は、「建学の精神」に基づいた教育を常に心掛け、奉仕活動や研究・教育におけるフィールドワークの重視、道徳の実践など、普遍的な「人間教育」



に力を注いできました。

#### 4 「建学の精神」は時を越えて

現代日本のさまざまな変化の要因は、乱開発や消費優先で自然に対する畏敬と感謝の気持ちを忘れ、過去の文物や教訓・伝統などを顧みることなく、ひたすら目先の利益や便利さ・敏速さ・快適さに溺れ、表面的な美しさや建て前をつくろうことに慣れてしまったことにあるのではないのでしょうか。時には立ち止まって、われわれはどこから来てどこに向かって進もうとしているのかと問いかける、つまり「根本」をよく考える必要があるのです。

國學院大學の「建学の精神」は、現代日本人の心の拠り所として、失われつつある日本の「品格」や「美風」を取り戻す原動力ともなりうるのです。その日本の根源とも言える神道精神に基づく道義の大学として、今こそ國學院大學の社会的使命は一段と増幅されたと言えましょう。

つまり日本人は古代から、諸外国が持つ「宗教」という概念では解明できない、「神道」という独得の文化を大切にしてきました。全国津々浦々の鎮守の森にたたずむ神社の存在は、日常生活のなかで身近な存在でした。外来の宗教や思想・文化に関しても、その時代ごとに十分に消化吸収して独自の伝統文化を培ってきました。

初代総裁有栖川宮<sup>ありすがわのみやたかひと</sup>熾仁親王の「告諭」に敬意を表すとともに、その「精神」を学んで継承してゆくことは、國學院大學の誇りであり責務なのです。日本の伝統や風習・価値観などを真摯に見つめ直し、その真理や美と心を体得して、日本の真の発展や国際社会に貢献することが期待されている大学なのです。皆さんもこのような深い意味のある「建学の精神」を心の糧に、これからの人生を潤い豊かに自信をもって歩んでください。

#### 5 「國學院」の宣言高く

皇典講究所は欧米の大学を倣って設立された東京大学とは別に、伝統文化を明らかにする教育研究機関として発足し、国の教育政策に合わせて規模の拡大を図り、さらに国法を攷究することを計画しましたが時世に合わず、明治22年（1889）には「日本法律学校」（現在の日本大学）を開設することとし、翌明治23年（1890）に、改めて国史・国文・国法を攷究する教育機関として「國學院」を開設しました。

特に「國學院」の開設と運営には、明治4年（1871）から明治6年（1873）まで、岩倉

具視を団長として欧米諸国を巡検した、いわゆる「岩倉遣外使節団」の同行者（山田<sup>あき</sup>顯<sup>よし</sup>・佐佐木高行・高崎正風・井上<sup>こし</sup>毅ら）が多数関わっていたことは特筆すべきです。彼らの多くは、国学の他に漢学・洋学などの諸学を修め、欧米諸国を実際に視察した、明治政府の役人であり文人でもあるというオールマイティーな国際人でした。

また、皇典講究所が設立された明治15年に、伝統的国漢諸学の高等教育機関として東京大学文学部に古典講習科が設置されました（その卒業生は後年わが国の伝統諸学の指導者となった）が、2回生で打切られたので、その教員・卒業生を受け入れてその学問を継承したのが「國學院」であったのです。さらには、明治9年に遡る神官養成を目的とする神道事務局の生徒寮も受け継ぎました。

そもそも「國學」とは、日本の古典研究から日本人の思想や文化を明らかにする、江戸時代に興った総合的な学問であり、「建学の精神」と呼応して「日本のアイデンティティー」を探求する学問といえます。日本の大学のほとんどが、西洋の学問や実学に根ざして開校しましたが、國學院大學は日本の近代化の原動力となり民族の叡智を受け継いだ国学、漢学を講ずると共に、広く外国の進んだ学問をも取り入れようとする理想を掲げた教育機関であり、「日本学」を教育理念として開校した貴重な校風の大学なのです。

## 6校歌に込められた「建学の精神」

大学令の公布（大正7年）に基づき、大正9年（1920）、國學院大學は慶應義塾・早稲田・明治・中央・日本・法政・同志社と共に大学に昇格し、最初の私立大学の一つとなりました。それ以前に大学として扱われていたのは、東京・京都・東北・九州・北海道の各帝国大学だけでした。

これを機に芳賀矢一学長は校歌を作詞し、「澁谷の岡に大學たり、古へ今の書明らめて、國の基を究むるところ」「外つ國々の長きを採りて、我が短きを補ふ世にも、いかで忘れむもつつ教は、いよ、みがかむもつつ心は」「國學院の宣言高く、祖先の道は見よこゝにあり、子孫の道は見よこゝにあり」と、「建学の精神」を高らかにうたいあげたのです。



皇典講究所 発祥記念碑



## 7 戦後の発展

戦後、他大学に先駆けて男女共学制を採用し、昭和23年（1948）に新制度による文学部を開設して以来、学部新設と改廃を経て、昭和41年（1966）には文学部・法学部・経済学部から成る文科系総合大学に発展しました。大学院も昭和26年（1951）の文学研究科神道学・日本文学専攻修士課程に始まり、日本史学専攻の修士課程、さらに文学研究科博士課程を順次開設し、昭和45年（1970）までに法学・経済学研究科の修士・博士両課程もそろいました。

## 8 國學院大學21世紀研究教育計画

平成14年（2002）に創立120周年を記念して、「建学の精神」を核としつつIT化・国際化など、時代の変革に対応できる体制を確立すべく、「國學院大學21世紀研究教育計画」を策定しました。この大改革の骨子は、①教育・研究の場の整備、②開かれた大学の実現、③高等教育政策・制度の変化への敏速な対応、④諸活動を通じての社会的認知の向上、の4点です。

その5年後には計画の見直しを行い、平成20年に「研究教育開発推進に関する指針」を策定しました。それに基づき、指針に宣言する「伝統と創造」「個性と共生」「地域性と国際性」の調和を「3つの<sup>おも</sup>慮い」とし、それを支える基盤整備を「5つの<sup>もと</sup>基い」とする立案・実行・検証を循環的に運営する責任体制を整えました。

創立130周年を迎えた平成24年には、新たに第3次計画を策定し、「3つの慮い」を大学の使命（mission）と位置づけ、大学の将来（vision）を支える、「5つの基い」を行動計画（action）とし、より相互の関連性を明確にして、具体例を通して学生の皆さんも理解しやすい示し方としました。

## 9 渋谷キャンパス再開発

平成14年に120周年記念事業として着手した渋谷キャンパス再開発は、約10年の歳月をかけて「120周年記念1・2号館」「若木タワー」「学術メディアセンター（AMC）」「3号館」を竣工し完成をみました。

今後は130周年記念事業として、体育館の敷地に複合施設を建設する計画等を中心とした、第2次開発がスタートする予定です。

## Ⅹ研究開発推進機構の発足と学術メディアセンター

「学術メディアセンター」は、「21世紀COEプログラム」によって、従前以上に拡大された研究を遂行するため、これまでの日本文化研究所をはじめとする各種研究所・資料館・記念室・図書館などを統合して、平成20年に竣工した複合研究機関です。平成19年に発足した「國學院大學研究開発推進機構」の統括のもと、「建学の精神」に基づく特色ある研究を推進し、その成果をもって広く社会に貢献することを目的とします。この「学術メディアセンター」は、「日本文化の総合的研究と発信のための世界的研究教育センター」として、日本のみならず人類文化に広く貢献することでしょう。

## Ⅺ教育開発推進機構の発足

少子化が進む日本社会は本格的な大学全入時代を迎えつつあります。それにともない多くの大学で、学力面でも志向性の面でもこれまで以上に多様な学生を受け入れるようになっていきます。本学も例外ではなく、社会に有為な人材を送り出す高等教育機関であることをいっそう自覚して、大学の個性である建学の精神のもとに教育の質の向上をはかり、社会的役割を十分に果たしてゆけるように機能強化を進める必要があります。そのため、平成21年に「教育開発推進機構」が発足しました。ここでは、本学の教育力向上と教養教育に関する調査・研究を行い、全学的もしくは各学部の教育に関わる人材育成を支援することを目的として、「教育開発センター」、「共通教育センター」、「学修支援センター」の3つのセンター組織を運営し、さまざまな事業を展開しています。詳しくは第8章「教育開発推進機構による教育力向上の支援と修学サポート」をご覧ください。

## Ⅻ人間開発学部の開設

創立120周年を迎えた平成14年に神道文化学部を開設し、平成16年の法科大学院開設に続き、平成21年、國學院大學に「人間力の育成」を目標に掲げる新しい教育系学部、「人間開発学部」が開設されました。人間のもつ資質・能力を可能なかぎり引き出し、育成すること、すなわち高度な教育力と指導力をそなえた人材を輩出することが人間開発学部の目標です。人間開発学部は、横浜たまプラーザキャンパスを拠点に、少人数教育による「響同」学習をめざしています。

### 3 これからの國學院大學

#### 1 普遍性・人間性の共有社会に向けて

これまで皆さんの中には、現代生活には古い歴史や古典（古文・漢文・哲学など）の学習は不要と思っていた方もいるでしょう。しかし、次々に移り変わる現代の諸事象の根底にある本質を見抜く力は、長い間の先人の知恵である古典とその学びの中に伝えられているのです。明治・大正・昭和の先賢が欧米の学問や技術を完璧に修得できたのも、古典学習の力があつたからです。その上で現在の新しい学問を身につけるといふ欲張りなまでの二層構造こそ、「國學院」の特長といえるのです。

いま世界に求められているものは、多様な文化の独自性の尊重と同時に普遍性の共有です。このことは個性の尊重と人間性の共有と置き換えてもよいでしょう。過去と現代、あるいは日本と世界をいくつもの対角線で結び付けて、関係と差異を見きわめ、人類の適切な発展のために世界に広く発信してゆくことも國學院大學の重要な使命なのです。

#### 2 國學院大學と共に

國學院大學では、この導入教育をはじめ、普遍的人間性に立脚した皆さん一人ひとりの価値観形成に寄与する教育を行っています。皆さんがさまざまな問題意識を持って、國學院大學の教育研究活動に積極的に参加することは、國學院大學と現代史を共有することになるのです。皆さんが國學院大學を礎に、日本や世界の将来を切り拓く真の日本人・国際人として飛翔することを大いに期待しています。

國學院大學に関心をいだいて、さらに詳しく知りたい場合は、大学HPの図書館蔵書検索サイトで、『國學院大學百年史』『國學院大學百二十年小史』と入力して調べてみてください。

# 國學院大學の歴史

## 明治15(1882)年の皇典講究所の創設



明治15年に創設された皇典講究所は、皇室の援助や総裁官をはじめとする関係者の努力により、神職試験を執行し、文学部と作業部の授業を通して有為の人材を育ててきた。また時代の進展とともに私立補充中学校を開設した。同校は「共立」「城北尋常」「城北」と順次名を改め、明治34年に「府立第4中学校」、昭和25年には「都立戸山高等学校」となり今日に至っている。次いで明治22年、国法を専修する「日本法律学校」(現在の日本大学)を開設した。

## 明治23(1890)年の國學院の設立

「國學院設立趣意書」に詳細に記されているが、国史・国文・国法の攷究機関として、本科3年と研究科2年の教育機関である「國學院」を設立した。

## 明治30年代の國學院大學



皇典講究所飯田町校舎(明治末期)

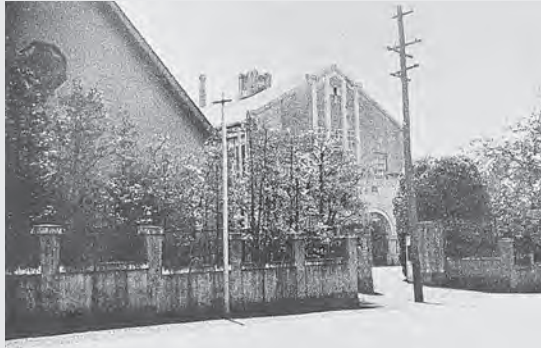
明治31年に財団法人の認可を受け、経営的基礎の確立を計ったが、明治35年、39年の2度の火災や、創設に関わった方々の相次ぐ死去によりその経営は必ずしも順調ではなかった。

明治36年9月、第一回卒業生を世に送ってから、経済的理由により自然休校していた研究科を再開し、明治36年公布の専門学校令により、翌37年に専門学校に昇格。その機会に大学部予科2年と大学部本科3年を設置。従来の国語漢文歴史科を師範部国語漢文科、歴史地理科とし、別に専修部を併置。明治39年には「私立國學院大學」と改称した。

## 大正9年の大学令による大学に昇格

大正7年12月の大学令公布に基づき、大正9年4月、大学令大学への昇格が認可された。名実ともに完備した大学に昇格したことにより、本学はますます学界・教育界に重きをなすことになった。この時、大学に昇格したのは2月5日付で慶應義塾・早稲田、4月15日付で國學院・明治・法政・中央・日本・同志社であった。

## 大正12年の渋谷氷川裏御料地移転



渋谷校地の正門付近

学生数の増加に対処するため、大正7年に拡張計画に着手。大正11年10月、校地を渋谷氷川裏の御料地、現在の渋谷若木が丘に求める。大正12年5月竣功。

## 昭和初期の発展と戦後皇典講究所の解散

昭和10年頃までの本学は発展の一途をたどり、本学の歴史の中でも「黄金期」というべき華やかな時代を迎えた。

しかし、第二次世界大戦後、GHQ（連合国最高司令官総司令部）は、神道指令を発し神社に圧迫を加えるが、GHQの意図が神社神道から国家的性格を除こうとするもので、宗教としての神道を抹殺しようとするものではないことを知り、本学は信教の自由という立場から神道精神に基づく学校として財団法人となし、合わせて経営母体である皇典講究所を解散させて新発足し、新時代の要請に応え得る大学への脱皮を図った。

## 昭和20～30年代の國學院大學

昭和21年、他大学に先駆けて男女共学制を採用。昭和23年には新制文学部、翌年には政治学部（昭和25年政経学部と改称）と文学部第二部を開設。昭和26年、学校法人國學院大學に改め、旧制学部第一部、専門部を廃止、政経学部第二部を開設し、大学院文学研究科神道学専攻・日本文学専攻の修士課程を開設、文学部神道研修別科を開設。翌年には日本史学専攻の修士課程を開設。また昭和28年には、旧制第二部文学部を廃止、日本文学専攻、日本史学専攻の博士課程を順次開設した。

昭和30年「日本文化に関する精深な研究を行い、これを汎く世界文化と比較しつつ、民族的伝統の本質と諸相とを把握すること」を目的とした日本文化研究所を設立。昭和33年には神道学専攻の博士課程を開設し、神道専修科を神道学専攻科に改めた。昭和35年には、栃木県栃木市に栃木高等学校を開設（昭和38年姉妹法人として独立）。昭和38年には、創学以来の懸案であった法学部第一部を開設した。



## 昭和40～60年代の國學院大學

昭和40年に法学部第二部を開設、翌年には政経学部を発展的に解消し、経済学部第一部、第二部を開設し、ここに三学部からなる新制総合大学の形態を整えるに至った。昭和42年には、大学院法学研究科修士課程、文学部第二部神道学科を開設、八王子校舎にて授業開始。昭和43年、大学院経済学研究科修士課程を開設、昭和44年、大学院法学研究科博士課程を開設、昭和45年、大学院経済学研究科博士課程を開設するなど、名実共に人文科学系総合大学として教育・研究の態勢が完成した。昭和57年、創立100周年を迎えた。

## 平成の國學院大學



平成2(1990)年「國學院」宣言100周年を迎えた。平成3年、傘下の短期大学である國學院女子短期大学を國學院短期大学に校名変更し、男女共学に移行。平成4年、第100回卒業式を挙行。第一部1・2年生の授業を横浜たまプラーザキャンパスで開始。平成8年、文学部及び経済学部を改組し、文学部第一部日本文学科・中国文学科・外国語文化学科、経済学部第一部経済ネットワーク学科、第二部産業消費情報学科を開設。相模原キャンパス開校。平成9年、創立115周年を迎えた。

## 現在の國學院大學



平成14年4月には神道文化学部（昼夜開講制）を新設し、平成16年4月には法科大学院を開設、続く平成17年4月には経済学部経営学科を開設しました。さらに平成21年4月、横浜たまプラーザキャンパスに人間開発学部（初等教育学科・健康体育学科）を開設し、平成25年4月には、新たに子ども支援学科を開設しました。



# 國學院大學の歩み

明治15(1882)年	皇典講究所の創設（千代田区飯田橋）
明治23(1890)年	古事類苑編纂事業を委託される（明治28年、神宮司庁に委託転換）、皇典講究所に國學院を設立
明治37(1904)年	「専門学校令」による専門学校に昇格
明治39(1906)年	私立國學院大學と改称
大正 8 (1919)年	國學院大學と改称
大正 9 (1920)年	「大学令」による大学に昇格
大正12(1923)年	渋谷氷川裏御料地に移転
昭和21(1946)年	皇典講究所の解散、財団法人國學院大學を設立
昭和22(1947)年	学部第二部を開設
昭和23(1948)年	新制文学部を開設、國學院高等学校を開設、目白学園を合併
昭和24(1949)年	新制文学部第二部を開設、目白分校にて授業開始、政治学部を開設
昭和25(1950)年	政治学部を政経学部拡充
昭和26(1951)年	学校法人國學院大學となる、旧制学部第一部・専門部を廃止、政経学部第二部を開設、大学院文学研究科修士課程を開設、文学部神道研修別科を開設
昭和27(1952)年	久我山学園（久我山高等学校・久我山中学校）を合併
昭和28(1953)年	旧制第二部文学部を廃止、目白分校での授業撤退、大学院文学研究科博士課程を開設、久我山分校で授業開始
昭和29(1954)年	付属幼稚園を開設
昭和30(1955)年	幼稚園教員養成所を開設、日本文化研究所を設立
昭和33(1958)年	久我山分校での授業撤退、神道専修科を神道学専攻科に改める、蓼科寮を開設
昭和35(1960)年	栃木高等学校を開設（昭和38年姉妹法人として独立）
昭和38(1963)年	法学部第一部を開設
昭和40(1965)年	法学部第二部を開設
昭和41(1966)年	政経学部第一部・第二部を廃止、経済学部第一部・第二部を開設
昭和42(1967)年	大学院法学研究科修士課程、文学部第二部神道学科を開設、八王子校舎にて授業開始
昭和43(1968)年	大学院経済学研究科修士課程を開設
昭和44(1969)年	大学院法学研究科博士課程を開設、國學院幼稚園を開設
昭和45(1970)年	大学院経済学研究科博士課程を開設
昭和52(1977)年	幼稚園教員養成所（各種学校）を幼児教育専門学校（専修学校）に改組
昭和57(1982)年	創立100周年を迎える、國學院女子短期大学を開設（北海道滝川市）
昭和60(1985)年	八王子分校舎での授業終了、新石川校舎（現横浜たまプラーザキャンパス）で授業開始、久我山中学校再開、高等学校に女子学級を開設、皇典講究所発祥記念碑を日本大学と建立（千代田区飯田橋3-5-5）
昭和62(1987)年	新院友会館竣工
平成 2 (1990)年	「國學院」宣言100周年を迎える
平成 3 (1991)年	國學院女子短期大学を國學院短期大学に校名変更し男女共学に移行、八王子分校舎撤退
平成 4 (1992)年	第100回卒業式を挙行、第一部1・2年生の授業を現横浜たまプラーザキャンパスで開始
平成 8 (1996)年	文学部第一部日本文学科・中国文学科・外国語文化学科、経済学部第一部経済ネットワーク学科、第二部産業消費情報学科を開設、相模原キャンパス開校
平成13(2001)年	法学部・経済学部の第二部を廃止し、昼夜開講制に移行
平成14(2002)年	文学部神道学科（一部・二部）を改組して、神道文化学部神道文化学科を開設
平成15(2003)年	120周年記念1号館竣工（3月）
平成16(2004)年	法科大学院開設、120周年記念2号館竣工（7月）
平成17(2005)年	経済学部に経営学科を開設、文学部日本文学科・史学科昼夜開講制を導入
平成18(2006)年	若木タワー（地下1階、地上18階）竣工（5月）、学術メディアセンター棟（仮称）着工（10月）
平成19(2007)年	創立125周年を迎える
平成20(2008)年	学術メディアセンター（地下2階、地上6階）竣工（3月）
平成21(2009)年	人間開発学部開設（横浜たまプラーザキャンパス）
平成24(2012)年	創立130周年を迎える
平成25(2013)年	人間開発学部子ども支援学科を開設

# 第2章 アカデミック・リテラシー —大学で何を学ぶか？ — ーいかに学ぶか？—

## 1 はじめの一步

大学に入学して、中学や高校での生活と最も大きな違いは何だと思いませんか。

現在の中学や高校では、受講する科目の選択幅は増え、融通性もある程度は確保されていますが、大学での学修はその比ではありません。100人の学生がいれば、100通りの学び方があると言って差し支えありません。それくらい大学での勉強は、学生の自由と本人の意志にまかされています。したがって、大学におけるさまざまな制度やきまりは、学生本意に定められています。

しかし、自由と学生の意志にまかされているとあって、それは無制限であるわけではありませんし、ぎゃくにそう理解することでかえって戸惑いを覚えることでしょう。何の方針もたず、やみくもに突き進んでも、皆さんの目的地に無事に到着するかは疑問です。つまり、何を学びたいか、どう学べば効率的なのか、どうすれば大学生生活を困難なく、不愉快な思いをせずに過ごせるのか、これについてはじめにある程度の知識と準備をすることで、その後の学生生活は大きく異なったものになります。そう、はじめの一步が大事なのです。

## 2 ルールの遵守

社会や家庭にもルールや秩序があるように、大学においてもさまざまなルールやきまりがあります。たとえば、一日の時間割を例に取ってみましょう。中学や高校と異なり、大学生は同じ学部学科の学生だからといって、毎日の時間割が同じであるとは限りません。学年によって、必修科目のクラスで顔を合わせる機会が多い場合もあるでしょう。しかし、1時限目から5時限目まで同じクラスで授業を受けることはまずありません。したがって、みなさんが受けた科目を受講できるようにするには、錯綜する複雑な学生の希望をじょうずに交通整理しなければなりません。そうでなければ、みなさんの希望を最大に活かすことができないからです。そのため、みなさんには守るべき基準があります。それが、いわば大学におけるルールなのです。学生の学修を入学した年度によってルールとして示すものが『履修要綱』です。さまざまな学修上のルールやきまりが書かれています。また、

それを補足する各種ガイドブック・ハンドブックがあり、必要に応じて読み、理解することが求められます。

みなさんが所属する学部や学科ごとに、定められた基準があります。また、学部や学科に関係なくすべての学生に適用されるルールもあります。これも一度にすべてを理解することは、なかなか難しいでしょう。必要に応じて必要な書類に目を通したり、相談窓口に出かけたりすればよいのです。ここで一番大事なのは、自分がどの学部・学科に所属し、どのようなきまりやルールに従って動かなければならないか、ということをはじめに自覚し、理解しておくことです。

### 3 目に見えないルール

社会にも明文化された法律のほかに、倫理・モラルや秩序といった目に見えないルールがあります。人間の善意や良心に基づく倫理規範がモラルであって、外から強制されて従わなければならない法律とは基本的に性格を異にします。大学においても同様に、明文化され定められたルールのほかに、大学という学舎につどう人として、相互に尊重し合う目に見えないルールがあります。いわば、キャンパス・モラルともいう呼ぶべきものです。

それは、おなじ大学に学び、学問教育を通して人間として成長してゆく場を共有する仲間を相互に尊重するという気持ちをもつことです。互いに切磋琢磨し、みずからの志向する学問を修得する環境を大切にすることです。そのような気持ちがあれば、それは自分にも返ってくることにもなり、そこに生活する人々にとって、相乗的によりよい環境がもたらされることになります。自分の大学をよりよくしていこうとみなが努力することによって、過ごしやすい環境や雰囲気ができます。学問や教育の場にとって、こうした空気は、目には見えませんが大きな影響力を与えてくれます。

### 4 学問の自由

大学は、学問の考究の場であり、各教員はそれぞれの専門の研究に専心することにより、学術の進展に寄与すると同時に、それを教育の場、日々の授業に還元するよう努力しています。大学では、およそ人間社会のさまざまな事象や文化現象に多角的に取り組み、問題の所在を分析解明して、その解決にいかに取り組むかの研究をしています。それは、学問の独立性や自由性の保証として、歴史的に尊重されてきています。

みなさんが学ぶ大学は、人類文化の進展に寄与するための機関であることを理解したう

えで、自分自身も、その一員になったのだという自覚をもって下さい。ぎゃくに言えば、人類の進展に寄与しない、あるいは人間社会の基本的権利に背くような学問は、大学ではできないことになります。このことはすでに理解していると思われませんが、いま一度、認識しておくことが求められます。

大学は進展する学術の最先端であると同時に、今までにおける研究の歴史を蓄えておく、知の宝庫でもあります。何を学びたいか、その志向性がすでにつよい学生には、おそらく興味ある授業や教員がみなさんを待ちかまえているでしょう。ぜひ、みずから積極的にその扉を力強くノックされることを期待します。

## 5 まず自分が動く

大学での自分の居場所を確認しておくことは、学生生活を円滑にするうえで重要です。ここで言う居場所とは、友達との待ち合わせの場所を言うものではありません。大学はあなたに何ができるか、あなたがどのような役割を大学に期待しているか、を問いかけるという意味です。大学には、何を学ぶために入学してきたかを、いま一度みなさんは自分の胸に聞いてみて下さい。それほど自分の進路や興味関心の向くことを考えてこなかった人もいます。でも、ここで立ち止まってでもいいからゆっくり考えて下さい。——大学に入って、何を学びたいのか？何をしたいのか？どんな資格を取りたいのか？

その目的がある人は、それぞれの目的にあったコースがあるはずで、あるいは、その目的にあったいくつかの選択があります。それに向かって進むことで目的地に近づけます。それが漠然としている人、他人まかせできてしまった人は、ここで十分に考えることが大

切で、いまからでも遅くはありません。はじめに、これからの学生生活の計画を立てることは、のちのちの後悔をふせぎ、効率のよい学修を進めるうえでも重要です。また、一度決めたが、方針を転換したいという場合もあるでしょう。大学のさまざまな制度は、やり直しができることを基本としていますので、そういった場合にも、ぜひ自分から進んで積極的かつ主体的に動いて下さい。



その際に、みなさんを教職員スタッフが支援していることを忘れないで下さい。各種分野に展開する多彩な教員、みなさんの学生生活を支援する職員スタッフ、こうした人々はたえずみなさんを全力で支援してゆきます。自分ひとりで迷わずに、不安や不明なことがあれば、遠慮なく相談の窓口を訪れて下さい。

## 6 自分で作る時間割

大学に入学して、まず取り組むことが、その年度の時間割を自分で作ることです。自分で時間割を作るということは、中学高校まではなかったことでしょう。選択科目には、何を選ぶかという自由はあったと思いますが、大学は基本的に全学で定められた必修科目の単位、学部学科できめられた取るべき単位以外は、基本的に学生の希望と志向性にゆだねられています。したがって、自分の学習計画に基づいてどの科目を取るか、どのような体系履修を考えているかを自分で判断しなければなりません。

その際に、目安になるのが、各教員が科目ごとに授業の目的・内容・学期の授業計画や評価の基準などを、あらかじめ提示した「シラバス」です。「シラバス」は、Web上で参照できます。これを十分読んで理解したうえで、必要な単位数と必要な科目を組み立てていく必要があります。

とはいえ、これらは学生本人が、何を学びたいのか、どのような専門に進みたいのか、何の資格を取得したいのか、といった前提となる希望や志向がなければ、その進むべき方向を指し示すことはできません。あくまでもみなさんの希望を実現してゆくための支えとなる、ガイドブックにしか過ぎないのです。したがって、自分の希望や志向性を明確にすることが大事だというのは、こうした理由からなのです。

早めに単位を沢山取っておこうというのが学生心理としてあります。しかし、予習復習も十分できない状態で授業に臨んでも、理解がじゅうぶんでないばかりか、消化不良に終わり、けっきょく単位を修得できず、成績も振るわず、悪循環に陥ります。大学では、年次ごとに何単位履修できるかというきまりがあって、その範囲内であれば履修ができます。これを「年次別履修制限単位」と呼びます。

自分の希望や志向に沿った計画的な学習をするように心がけましょう。前期と後期にバランスよく、1年から4年までを計画的に、実習・インターンシップ、就職活動なども考慮に入れて、無理のない履修をするよう心がけましょう。



## 7 学問創造の「場」

みなさんが入学した大学という環境は、学術研究の最先端であり、授業でもその一端にふれる機会があるでしょう。みなさんが大学で学ぶ目的や動機も大切ですが、そのダイナミズムにふれて、学問の素晴らしさや、その力強さをぜひ感じて下さい。また、学術研究や学問といえば、堅苦しさや、難しいという印象を受けるかも知れませんが、その目指すところは、真実の解明と人類の幸福の追求にあります。これは誰にとっても身近で、かつ重要な事柄であります。そうした学問創造の「場」に、みなさんも一員となって加わるということになります。

とはいえ、長い間に積み重ねられてきた学問の歴史と知識の蓄積は、その恩恵を享受するには基礎的な訓練やトレーニングを必要とします。したがって、大学入学後しばらくは毎日が同じことの繰り返しに見えたり、高校の延長線上にあるように思ったりすることがあるかも知れません。しかし、そうした中からしだいに専門の分野に親しみを覚えたり、面白さを発見したり、意外な関連を見つけて楽しんだりするようになるはずです。

そのぎゃくに、あまりに講義が難しく聞こえたり、まったく理解できなかつたりして落胆することもあるかも知れません。多くの学生すべてに同じように理解させるつもりで話しても、受講者側の準備がいつも同じであるとは限りません。分かることと分からないこと、理解できることと理解できないこと、これらをはっきりさせるのも、学ぶうえでは大切です。その準備のための授業も用意されています。それらを通じてよりよい理解に至ることも必要でしょう。

しかし、その近道になるのが、やはり学ぶ主体であることの自覚をもつことです。疑問に思ったこと、興味の湧いたことを自分なりに図書館で調べたり、データを分析したり、友人と意見を交わしたりすることで理解が深まり、納得のいく勉強になるでしょう。自分の足で調べ、手を動かしてまとめた事柄は身に付き、容易には忘れません。

ぜひ自分でノートを作り、図書館に足を運び、あなた自身の「学びの履歴」を作っていくて下さい。

## 8 教員や友人とのふれ合い

大学の素晴らしいところは、各専門の多彩な教員がそろっており、それぞれの研究分野を授業に還元すると同時に、教育研究を通じてみなさんとふれあう機会もつことになりま



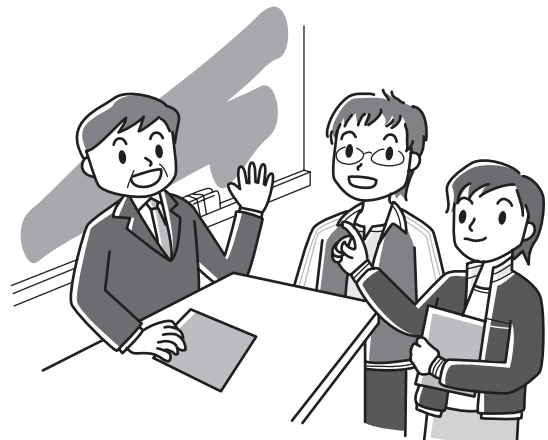
す。人間は人間によって育まれます。そして、大学が果たすべき使命のなかに、入学してきたみなさんの人格陶冶がうたわれています。ひとくちに人格陶冶と言っても、そう容易ではありませんし、目に見える形で実現できるわけではありません。

しかし、確かに言えることは、大学に入学してみなさんが手にするもっとも大きな財産は、人と人とのつながりであり、和であるということです。一生の友人を得た、あるいは生涯の師と出会ったという話はよく聞きます。クラスで自己紹介をするときに、「友達になりたいので声をかけて下さい。」という言葉をよく聞きます。なかなか初対面のクラスメートに声をかけにくいと思いますが、その思いはみな同じです。これも、そう思ったらまず自分から声をかけてみましょう。きっとそこから話が展開することでしょう。

教員の立場からしますと、授業の中で受講者とコミュニケーションを取りたいと思います。そこで、授業の途中や最後に質問はと問いかけます。それでも、なかなか質問は出ません。よい質問は授業をもり立て、理解不足を補うよい機会であると教師は思うのですが、なかなか出ません。しかし、授業が終わり教室を出ようとする、「質問があります。」と恥ずかしそうに聞きに来ます。これも、質問項目を共有したほうが受講者全員のためになるという教員の思いとは裏腹に、学生は自分の問題だからとってしまいがちになります。

授業をクラス全体で共有し、盛り上げ、一体となるよい授業を作り上げるのは、じつは教員ではありません。教員はそのために全力を傾注して準備はしますが、受講者の積極的な参加と主体的な勉学の姿勢にはかないません。こうした積極性や参加意識があるクラスには、もはや教員の予測を超えたエネルギーがあります。それは参加者に相乗的な効果をももたらします。

友人や教師、人との出会いは、大学でのもっとも素晴らしいできごとです。そうした素晴らしい機会を逃すことなく、積極的に自分からすすんでふれあう機会をもつようにしましょう。



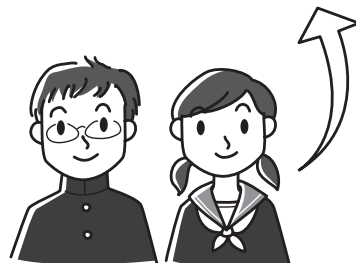
# 第3章 大学で学ぶ意識と意義

大学では、高等学校で学んだことのない全く新しい分野や、より高度で専門的な知識を学びます。高校時代に「正解」であった事柄が、実は「間違い」ないしは「他にも正解がある」ということを教えられることがあるかもしれません。なぜならば大学では専門家集団が最新の研究をしており、その成果は授業をとおして皆さんに還元され、皆さんは最新の知識を修得することによって、自身の付加価値を高めてゆくからです。

## 1 大学で学ぶということを考えるうえで、高校と大学の違いを確認しよう

大学と高校は違うとよく言われますが、本当のところどこがどのように違うのかをきちんと認識することが、有意義な大学生活を過ごす出発点になります。中学・高校までは皆さんは「生徒」でしたが、大学では「学生」になります。名は体をあらわしますから、名称が変わるということは、中身あるいは実体が大きく異なることを意味します。単にひとつ歳をとるとか、入試というハードルを越えただけではありません。「学生」はstudentの日本語訳ですが、studyと関係がある語だと推察がつくでしょう。ラテン語（ローマ帝国の言語で、かつてはヨーロッパの共通語でもあった）の studiumから生じた語ですが、studiumの本来の意味は「熱意、情熱」で、派生的に特に「学芸へ打ち込むこと、学問への熱中」の意味があります。普通の英和辞典にもstudentには「〈ある分野に〉強い関心を抱いている人、研究者」といった意味が出ていでしょう。[ここで、「本当かな?」と思って、英和辞典を引いてみる人は、好奇心と探究心の点から「学生」の有資格者です。]

大学生になるということは、いろいろなことに強い関心を持って探求する人たちの仲間入りをするを意味します。その種の熱意を持った人々（教員と学生の両方ですが）と「場を共有して」、新たな知識を獲得し、知恵をはぐくみ、教養を深め、友人をつくり、自らを自ら育て上げ、将来的に社会へ還元するのが「大学」のできることです。皆さんにとって計り知れない価値のある「チャンス」が与えられたと考えるべきで



しょう。現在の日本ではほぼ5割の人が大学に進学しますが、「世界が100人の村だったら（“If the World Were a Village of 100 People”）」によれば、世界中で大学教育を受けている人は「たった一人、たった1%」にすぎません。

大学で皆さんは、「自らの自由意志にもとづいて判断し、行動し、責任をとること」を基本的に求められます。つまり、1人の個人としてまともに社会生活（大学も社会の一部です）を支障なく送ることができるようになるための準備をします。最も重要なことは「問題を見つけ出す能力」と「解決に導くための方法」であって、結論そのものではありません。結論は時代や状況によって変わるものです。何が問題であるかわかれば、解決の方法はさまざまですが、何とかなるものです。大学の教員のすごさは「調べる方法」に長けていることです。方法を知らないと何もできません。高校までは問題はどちらかといえば周囲から与えられることが多かったでしょうし、あらかじめ敷かれたレールの上をあまり深く考えずに歩いてきたと思います。大学ではレールを敷く材料は用意してありますし、いろいろな敷き方をお教えしますが、レールを実際に敷いて、どんな列車をどのように走らせるかは皆さん自身にまかされるのです。大学は誠心誠意そのお手伝いをしますが、主役は学生である皆さん一人ひとりです。

## 2 大学でのまなびの実際

たとえば高校時代の夏休み、予備校に通って、そこで提供されている教科を自らの意思で選択し、習ったのではないのでしょうか。そのときの選択する基準というのは、〇〇大学に合格するためには、英語の点数を上げる必要がある→英語の中でもウイークポイントは、文法である→そこで、英文法について集中的に解説があるこの科目をとろうというふうに、目指す大学に合格するというゴールを見据えて、科目を選択したことでしょう。

大学の授業も同様です。皆さんが自分自身の4年後になっていたい自分の姿を想像し、そのために必要な科目を選択するということが大切です。

ゴールは、入学した学科の学問の延長線上にあることが望ましく、まずは学部学科が示す専門課程の体系的なカリキュラムにより、基礎科目を受講することから始まります。ですから最初は不安でしょうが、迷うことはありません。もっともベーシックな科目は、多くの場合「必修」となっており、その後の専門を学修するうえでの基礎力が自然に身につくようにカリキュラムは設計されているからです。ただしその科目を合格しないと次の科目に進めない、ないしは卒業できないなどの制約が、カリキュラム上課せられています。

## ■単位制とは

高校時代は意識することがあまりなかった「教科に合格すること」とついて、大学ではどういうことなのか、単位制を導入している高校を卒業した方は、ある程度想像できるかと思いますが、考えてみます。

大学では、「履修要綱」によって定められたルール（卒業に要するカテゴリーごとの要件）にしたがって、学科の理念であるカリキュラムポリシー（履修するための基本的な考え）を理解しながら、自己の興味と好奇心によって、学びの履歴を完結させていきます。

各科目の運営は、授業担当の教員にまかされており、60点以上を合格として、評価がなされます。合格をすると規定の単位を取得できます。単位とは国が定める「学校教育法施行規則」及び「大学設置基準」によって規定されているのです。

そもそも単位（credit）制とは、アメリカの高等教育システムで導入された、学位（degree）制度の基幹を形成する考え方です。その考え方は世界の単位制を導入している大学では、同じ定義と解釈をしています。つまり國學院大學が授与した「学士」（Bachelor of Arts）という学位をもってさえいけば、単位制をとっている世界中の大学院修士課程へ入学、または大学へ学士入学をする権利を保障されているのです。また世界中で学士の資格をもって職を得る権利を有しているともいえます。

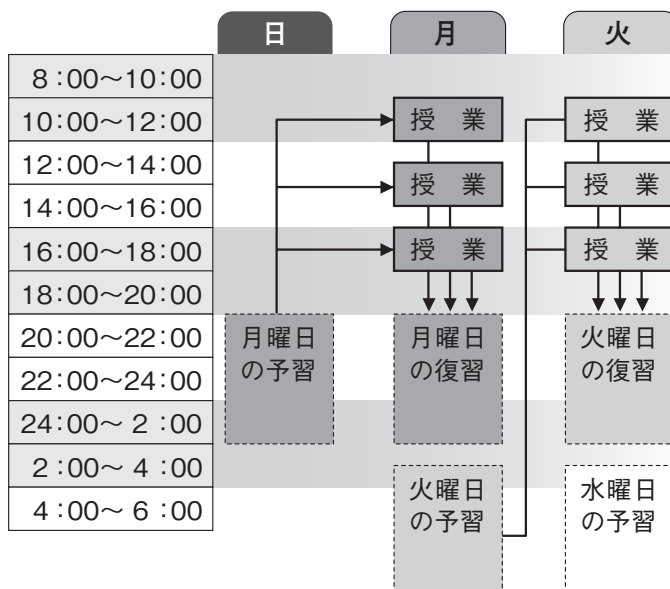
文部科学省が定める「大学設置基準」では、授業の性格によって細部は異なりますが、基本的には1単位は教室の内外で45時間の授業と学習（予習・復習・発展学習）をもって構成されています。これにもとづいて、國學院大學では、講義系の科目については半期（15週）で2単位、講義と実験や実習・実技を併用する科目では半期1単位と定めています。教養総合の「主題講座」などは前者に、「外国語」科目や「スポーツ身体文化」科目などは後者に該当します。なお、若干ながら、通年4単位の科目も残っています。重要なことは、1回90分の授業（これを 2 school hoursで「2時間」とみなす）に対して、**教室外の予習・復習の時間を含めて「単位」が設定されている**ことです。しかも実際には、学修成果を試験やレポートの形で示さねばなりません。ただ教室に来て座っているだけでは「単位」の要件は満たしません。大学の学修成果の保証としての単位の認定には、自学・自習分が含まれているのです。けれども、1日は24時間ですから、履修登録したすべての科目に必ず一定の予習・復習の時間を割いたら、現実には寝る暇もなくなるでしょう。1年間の履修登録単位数の上限を定めている理由のひとつも、そこにあります。しかし、授業は「誰でも知っていること」「半分ぐらいの学生が知っていること」「ほとんど誰も知らないこと」

がミックスされているものであり、一から十まで予習する必要は必ずしもありません。予習で重要なことは、「わかる部分とわからない部分を区別する」ことです。予習してよくわからなかった部分については、特に注意して授業を聞きます。わかったと思っている部分についても、思わぬ誤解をしているときがありますから、きちんと聞かねばなりません。昔は「おさらい」などとも言いましたが、復習は学んだことを繰り返して練習して確実に身に付けるために重要です。必要な、肝要な部分について教室外でもきちんと学修することが求められているのです。あまり拘り定規に考える必要はありませんが、自分の怠け心に都合のいい考え方をされても困ります。学習効果を上げるためには、絶対に予習・復習は欠かせません。

単に卒業するためだけでなく、上乘せして教職・資格課程を取得しようと希望すると、これにプラスして学修活動が必要になり、大学が示す履修登録の上限の枠外での履修が可能のため勉強量が相当増えますから、学修計画について十分に注意する必要があります。

## 勉強と大学生活とのバランスを考えよう

学生生活には、課外活動としてのクラブ活動などで、共通の目的をもつ友人との交友を深めたり、他者理解の場として人間関係を学んだりすることも必要です。アルバイトを通じて社会との関わりや勤労の尊さを学ぶことも大変重要です。しかし学生の本分としての学修時間を大幅に削り、それらに費やしたりすることはどうでしょうか？ 学生の



日常のあり方としては、アルバイトは適切な職種を選択すべきであり、適度な時間内にとどめておくことが必要であることは、理解できることでしょう。



### 3 4年間を通した単位履修を考えてみる

さて、本学を卒業するためには、124単位を修得しなければなりません。この他にも必修科目や選択科目といった区別での修得単位の条件などが、各学科により定められています。そこで、このもっとも基本的な124単位という卒業条件をどう満たすことが適切かということについて、考えてみます。1単位の修得にどれくらいの学修活動が必要かということについて、先に述べました。これの最低124倍の学修量が4年間で必要ということになります。「4年後の自分」を考えた場合、もっとも多くの学生が該当するケースを具体的に検証してみましょう。

#### 【企業に就職する場合】

現在の就職活動の詳細は、キャリアサポートの章に譲りますが、実際の活動期間の多くは3年生の後期から4年生の前期と考えてください。そのうちでも授業に出席できないような企業訪問、筆記試験・面接試験のための受験などの学外活動期間は、3年生の1月末から、内定の出始める4年生のゴールデンウィーク前後までと考えられます。会社などからの呼び出しは、2月・3月は別として、4年生の4月以降については授業などの予定も考慮してくれます。とはいえ一週間びっしりと時間割が組まれていれば、企業側としては、「4年にもなってそんなに授業が残っているのか。卒業できるのか。」と不安視されることは間違いありません。あるいは、それを恐れて授業を欠席して就職試験を受けに行くことを続けていると、授業に出席していないわけですから、その科目を合格することは困難になってゆきます。原則、就職活動とはいえ授業への出席の扱いとはなりません。就職活動を一生懸命にして、希望の企業から内定通知をもらったとしても、卒業ができなくて内定取り消しとなる場合が、毎年見受けられます。これは学生自身にとっても、内定先の企業にとっても、保護者の方々にとっても、そして大学にとっても非常に残念な結果です。

こういう事態を招かないように、どうすべきか？ 4年生での学修と定められている（開講学年が4年生のみと示されている）科目、例えば卒業論文、専門演習の一部、教育実習関係など以外については、3年次までに修得可能です。したがって表1のように、3年終了時点までに、112単位修得を目指すこと！ これが、卒業と同時に就職するための理想形です。



表1 理想的な単位取得

	1年次	2年次	3年次	4年次
年次別履修上限	42単位 ※注1	42単位 ※注2	42単位 ※注2	48単位
理想的な修得単位数(累計)	37単位以上	74単位以上	112単位以上	124単位以上
合格率	80.4%	77.1%	79.2%	

※注1) 1年次は前期のGPAが2.20以上であった場合に学年上限に4単位、

注2) 2年次・3年次は、前年の年度GPAが2.20以上であった場合に学年上限に6単位を加える。  
4年次は一律48単位とする。

### 【公務員・教員希望の場合】

単位取得の目安は、企業の場合と大きくは変わりません。しかし、公務員試験はおおよそ6月以降に試験が実施されることが多く、国家公務員から地方公務員まで受験を続けると、全国をまたに駆けて受験の旅が続くことになり、授業への出席はさらに難しくなるでしょう。4年次に必修科目がない学部の学生は、3年間で卒業単位を満たすよう、早い時期からの準備が必要です。

また一般論として、国家Ⅱ種に合格するための平均的な勉強時間は、最低1,500時間、また地方上級(県庁)に合格するためには、最低2,000時間の受験用の勉強が必要と言われています。これについて、試験が4年生の6月に実施されると想定すると、入学から38ヶ月後ということになり、 $2,000時間 \div 38ヶ月 \approx 52.6時間!$  入学後ほぼ毎日2時間、そのための受験勉強をしなければならないという計算になります。これに先ほどの予習・復習を足してみましよう。早い時期からの毎日の地道な努力と効率的な学修が必要なことが理解

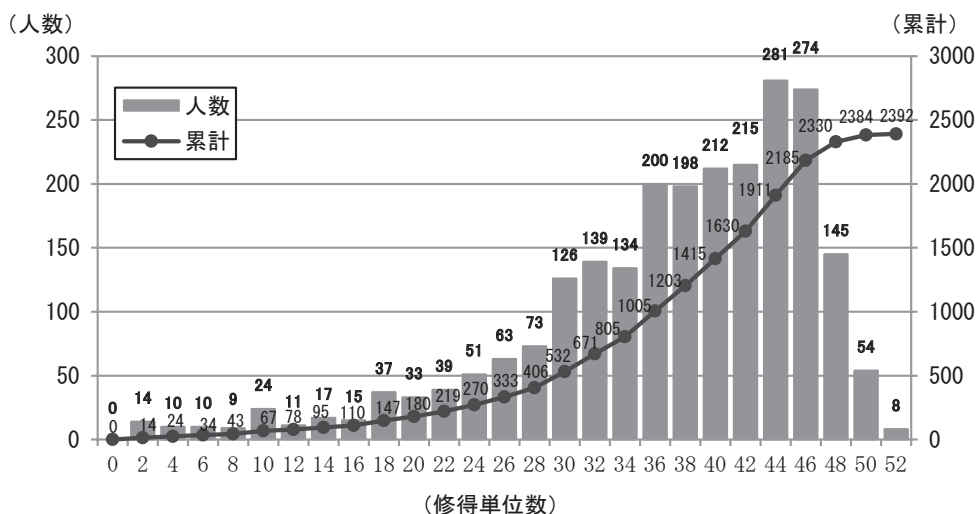


図2 平成24年度入学生の単位修得状況 (1年次)

できるはずです。

教員を志望する場合、4年生の5月から7月までの間に約4週間の教育実習に出向かなければなりません。昨今の教育現場の大変さはいうまでもなく、正課の授業案の作成や、課外活動の指導補助など、朝早くから夜遅くまで拘束されることを承知していなければなりません。つまりこの間は大学での授業に出席できず、企業等への就職活動も一切できないということになります。公務員、教員志望を問わず、継続的な努力とそれを始める決断は、早ければ早いほうが良いでしょう。

### **【大学院を受験する場合】**

「21世紀は知の時代」と提唱したP. F. ドラッカーによると、知識社会とは、「継続的に知識を高めていかないと競争に勝ち残れない」社会のことです。高度な知識の不断の取得こそ、今後の社会に必要とされています。その知識修得の機会を博士課程に求めることは当然といえるでしょう。本学の場合は主として研究者養成を目的とした研究科であり、進学する際には4年間の学士課程のなかで絞られた研究テーマが明確に認識されていなければ、全く入学する意味はないでしょう。

本学の大学院の入学試験は、秋季（10月）または春季（2月）に実施されます。試験科目は「専門」、「英語」・「中国語」そして「口頭試問」・「研究計画」等が確認されます。まず大学院に進む目的を明確にしなければなりません。英語については、大学院では原書講読の必要性から、専門課程の教員による出題がなされます。学科のフィールドの関係原書を読解する訓練が準備になります。また最近では3年生を終了した時点での飛び級入学の制度を導入している研究科もあり、やはり3年生までの学修が大切になることはいうまでもありません。

### **4 どうすれば授業科目を合格できるか？合格の秘訣とは？**

高校時代、すべての科目にきちんと合格し、卒業してきた皆さんにとっては、大学でも同様に4年間で卒業するものと考えているでしょう。にもかかわらず、実際は進級判定（本学では全学で2年生から3年生に進級する、更に経済学部は1年生から2年生に進級する際に、条件を課している）において約10%、卒業判定において約16%の学生が、失敗しているのです。これは同年次に入学した学生の約25%（4人に1人）が4年間で卒業できていない計算となります。なぜこんなことになってしまうのでしょうか？

本学の科目単位の合格率の平均が約75%であることから、データとして重なり合います。一科目を大切に学んでゆくこと、それを積み重ねてゆくことが4年間での卒業を可能にするといっても過言ではありません。

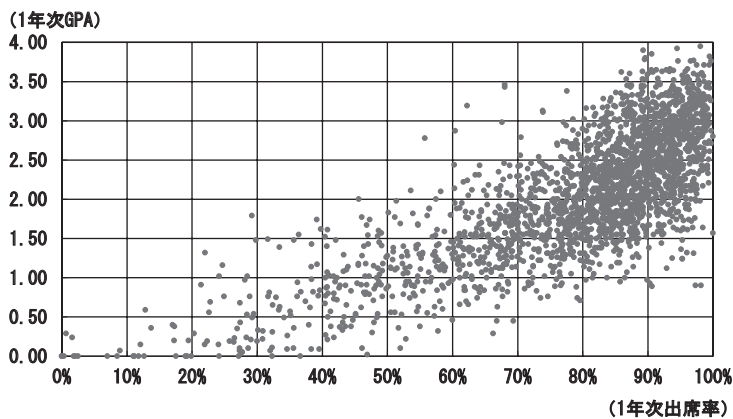


図3 平成24年度入学生 1年次出席率と1年次GPAの相関関係

それではどうすれば授業科目に合格できるので

しょうか。図3は授業への出席状況と成績の良し悪しの関係を調査したものです。明らかに授業に出席しなければ、良い成績を納めることができないことがわかります。大学の授業は高校時代の延長線上にあるとは考えない方がよいでしょう。もちろん高校までの学習は大学での学修の下敷きとなり、最もベーシックな知識として、皆さんを助けることでしょう。しかし大学でのまなびは、すべてが新しい学問・知識の修得だと考えてください。

1年次の皆さんが今何を必要としているか、これから新しい学問や知識とたくさん触れ合ってゆくことになります。それがあなたの力となることでしょう。そのためには毎日の授業にきちんと出席することです。自らが4年後になりたい自分を定めた、その積み重ねの第一歩として、自らが選択した科目にきちんと向き合うことです。日常的な学修活動こそが、合格の秘訣です！



## 5 授業での評価の仕方

高校時代は、それぞれの科目はどのように評価されていたのでしょうか？多くの場合、中間テストと期末テストの結果、授業への出席、参加度、宿題の提出……などを総合的に

評価するというのが一般的だったでしょう。本学の場合は、大きく次の4つの方法に分けられます。

#### ①平常点評価

授業時の、出席、授業への参加度、発言の多少・質、宿題、小テスト、小レポートなど、日常の学修活動を総合的に評価する。

#### ②授業時試験

通常、最終授業において、担当教員が直接試験を実施する。外国語科目の場合は、口頭試問（インタビュー形式）が実施されることもある。

#### ③単位レポート

教員が指定した、テーマと形式に従って、定められた日時までに、教務課に提出する。締め切り時間は、NHKの時報をもって受理を終了するほど厳格である。

#### ④期間内試験

高校時代の期末試験と同様に、一定期間が試験週間となり、試験用の特別の時間割が組まれ、一科目60分で試験（ペーパーテスト）が実施される。評価は、試験の良し悪しで決まる。

中等教育（中学校・高等学校の両方をさす）においては、大学受験を前提とした、あたかもそれを最終目的とするかのようなトレーニングが積み重ねられており、それは「設問に対してきちんと答える」という姿勢です。マークシートならば答えがわからなくても、マークだけはしましようという受験テクニックを教えられたでしょう！ところが大学の試験問題は1行から2行の文章があり、あとは白紙の解答用紙が渡されるわけです。ペーパーテストにしても、穴埋めや選択問題はほとんどみあたらないと考えてください。

次に本学の試験の過去問題について、いくつか紹介しましょう。

- ①…について具体的な事例を挙げ、論述せよ。論述の際には、挙げた事例に対し、どのように考察し結論を導いたか明確になるように留意すること。
- ②…の要点を説明し、それに対するあなたの見解を述べよ。
- ③…についてその問題点、課題などについて解説し、さらに自分の考えも述べなさい。
- ④誤字脱字は、減点の対象とする。という親切なものまであります。

①～③のように論述の組み立て、あるいは考え方の筋道を親切に示している問いもありますが、多くの場合「～について記述しなさい」、「～について説明しなさい」といった、文章による解答を求められます。教員によっては試験の際に資料やノートを試験教室へ持

ち込むことを許す場合もありますが、一切許可しない場合もあります。

解答の際には、授業で講義されたことの確実な知識の修得と理解、日々社会で起こっている出来事への関心と理解、さらには先人が残してくれた書物からの知識など、多くの知識の中から、自分自身の考えをまとめる力を求められているのです。つまり考え方を問われているのであり、その考え方に則して論理的に正しい結論かどうかを問われることが多く、その方法を身につけることが必要となります。皆さんが大学生となり、学問や新しい知識と向き合う姿勢は、まさにこれが求められており、批判とそこから湧き出る疑問やそれを解決しようとする好奇心が学術を進展させていくのです。それが問題解決能力なのです。

## 6 大学で学ぶ意識

本学の履修要綱やリーフレットでは、“学習”ではなく“学修”という漢字を用います。これは広辞苑によると、“学習”は「まなびならうこと」とあります。これに対し“学修”は「学問を学びおさめること」とあります。皆さんが本学に入学し、社会的に生徒から学生になるということは、「学校教育法」によって定められています。そして多くの大学生は、在学中に、成人となります。“成人”とは「おとな。青年期に続き、心身の発育を終え、一人前になった者」とあります。

大学でのまなびは、「ならう」ことから「おさめること」へ大きな意識改革が必要です。大学でのまなびは、皆さんが自ら設計できること！ これは高校時代の学期初めに、時間割と教科書を手渡されたことを思い出すと大きな変更点です。高校時代は、実際の進路（進学先）は皆さんが決めたのですが、学びのゴールは、皆さんの意図にかかわらず、あらかじめ学習指導要領によって最低限の姿が決められていました。大学での学びのゴールは、皆さんが自らの責任で決めなくてはなりません。まなびの選択の自由が与えられていることと同時に、学ぶ義務とやり遂げる責任があることは、大学生としておとなとして、自覚してください。授業担当教員は、それを前提として授業運営を行っていることも認識しておく必要があります。つまり教員の側からすれば、「勉強したいから、この科目を自分で選んだのでしょ！」ということなのです。

そして最も重要なことは、大学4年間の学修にはゴールがあっても、それは人生全体にとっては“始まり”にすぎないということです。



# 第4章 ノートのまとめかた

## 1 なぜノートを取らなければならないか

高校時代と大学の授業では、ノートの取り方に大きな相違があります。高校では、教室の全員が教科書を持ち、先生は指導要領に沿って授業を行い、黒板に要点をまとめ、皆さんはそれをノートに書き写していたことでしょう。

大学の講義形式は、教科書を使用する、資料を配付する、機器を用いる、などさまざまです。ただいずれにしても、それぞれの教員の研究成果に基づいて、独自の展開をするのが特徴です。したがって、その講義の性質を把握するためには、ノートは不可欠な存在になります。ノートはけっして補助的なものではなく、講義内容を自らの理解によりまとめた、大切な宝物だと認識する必要があります。

ノートの取り方には、人それぞれの違いはあります。ある講義時のノートには、先生の話した一言一句はおろか、笑い声や咳まで記録されていたといえます。こういうノートの取り方もかつてはありましたし、今もないわけではありません。ただ、それは少し極端な取り方です。次のことに留意してノートを取りましょう。

- 1 板書してある事柄だけをノートに書き写すだけでは不十分。
- 2 板書だけではなく講義内容の重点ポイントを書き記すことが大切。
- 3 講義時に取ったノートを復習して補足すること。

次に、講義時に取ったノート（授業時ノート）を、どうやって自分の役に立つノート（完成ノート）にするのかのアドバイスをします。



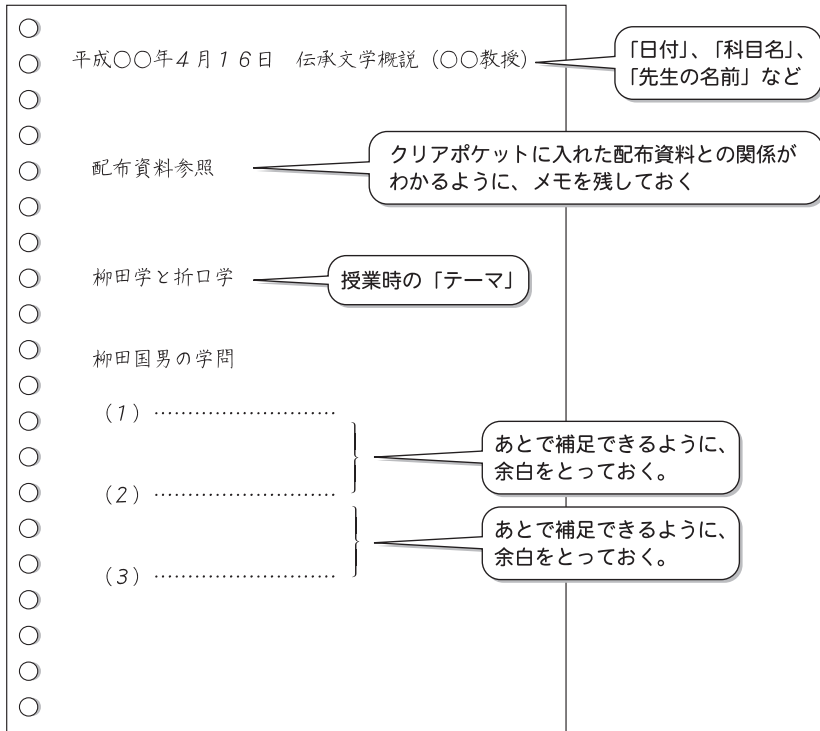
## 2 重要ポイントをノートする—授業時ノートの取り方—

〈完成ノート〉にしていくためには、まず基礎となる〈授業時ノート〉をどのように準備し、作成するのがポイントになります。ルーズ・リーフ式の挿入や削除可能な形式のノートを用意しましょう。1年間で多くの講座を受講すること、またあとで自ら学習をして補足することを考えると、この形式のノートがもっとも便利です。これを1～2冊用意すれば受講する全ての講座に、共通して使用できます。ただ、ルーズリーフ型のノートの欠点は、毎日きちんと整理をしないとバラバラになりやすく、あとで一部揃わなかったりすることがあります。授業でかなりの分量が必要であると予めわかっている場合は、一冊のノートを用意するのも良いでしょう。

次に〈授業時ノート〉の作成にあたっては、

- 1 配付資料を保存できる、透明ポケットを何枚か付けておく。
- 2 筆記具は、鉛筆・シャープペンシルを用意する。疲れの少ないHB・2Bなど柔らかめのものがよい。ボールペンは、削除や訂正ができないから用いない、などの準備も必要。
- 3 講義時にまず、冒頭の余白に必ず「科目名」「授業日」を、大きく書く。1枚の表と裏を別々の講義に使用しない。  
※独立した〈完成ノート〉を作れませんので注意。
- 4 講義を聞きながら、板書事項や講義内容の重要ポイントをノートに取る。
- 5 授業内容は、余白を多く取ってノートをする。  
※これは、あとで自ら補足したり参考資料を貼ったりするため。
- 6 マーカー使用は、最小限度にする。  
※講義内容を理解することが一番の目的だから、〈完成ノート〉作成の時点で。

## 【例】



という点に注意しましょう。そして、何よりも大切なことは、理解できないこと、さらに深めたいことがあったら、教員に積極的に質問をする、ということです。

### 3 授業時ノートを完成ノートに一完成ノートの作り方

授業時ノートは、自ら調べ補足して〈完成ノート〉にしておくことが大切です。記憶が残っている内に、復習する習慣を身に付けましょう。

〈完成ノート〉は、講座ごとに別々の独立したノートにします。

1

2 穴式のルーズリーフノートを用いる。  
※コピーなどを挿入するには、26穴式では綴じることができない。

2

配付資料を保存できる、透明ポケットを何枚か付けておく。

3

授業時にノートした箇所の意味や内容がわかるように補足を書き込む。また、重要な箇所が後で再確認できるように、下線を引くなど工夫する。

4

各回のノート箇所の最後に、各回の要点をまとめたり、重要点を記したり、自分の感想や意見を簡単にでも書いておくとよい。

【例】

1 ページ目

講義の順番回数

平成〇〇年4月16日 伝承文学概説(〇〇教授)(2)

配布資料参照

柳田学と折口学

見やすい工夫(マーカーやサインペンなど)

2 ページ目

※①.....

.....

.....

.....

.....

○ 【柳田国男の学問】

(1) .....

※①参考文献(次ページコピー参照)

(2) .....

※①参考文献(次ページコピー参照)

(3) .....

○ ※〔経歴・著作〕

.....

※(まとめ)

.....

この時点での自分の考えもまとめておくとよい。

■補足した箇所  
自分で補足したものについては、※などの記号を用いると、あとでわかりやすい。

# 第5章 リポート作成に関する10のアドバイス

## 1 はじめに

大学では、いろいろな講義でリポートを書く機会があります。ところが、これまでリポートを書いた経験がないので、リポートを書けといわれても、どうしていいかわからず困ってしまう人がたくさんいます。そして、よくわからず自己流で書いた結果、せっかくのリポートが十分に評価されない結果に終わってしまいます。

ここでは、よいリポートを作成してもらうために、リポートを書く場合の基本的な考え方と手順についてアドバイスしていきます。

## 2 リポートって何？

いきなりですが、「リポート」ってなんだかわかりますか？ なんだか分からないことをやれと言われても、できるわけがありませんよね。リポートを書く場合に、最初に知らなくてはならないことは、「リポートとは何か」ということです。

大学で「リポート」と呼ばれるものには2つの種類があります。1つは「報告型」のリポートです。このタイプのリポートでは、与えられたテーマについて、信頼できる情報源から得た情報を、整理して報告することが求められています。「～について説明しなさい。」というテーマが出されているときには、このタイプのリポートが要求されています。もう1つは「主張型」のリポートです。このタイプのリポートでは、自分の主張（結論とその論拠）を明示し、それを信頼できる適切な証拠によってサポートすることが必要になります。「～について、あなたの考え方を述べなさい」というテーマの場合には、こちらのタイプのリポートを書かなくてはなりません。

### アドバイス

#### 1

「報告型」のリポートなのか、「主張型」のリポートなのか、区別してから、準備を始めよう。

リポートを書く前に、まずこの2つのタイプのリポートをきちんと区別しましょう。報告型のリポートに、自分の主張をいくら書いても評価されませんし、主張型のリポートなのに、調べたことをまとめただけ、というのも評価されません。どちらのタイプかわから



ないときには、先生に聞きに行きましょう。テーマを出す側は、どちらのレポートを求めているか（あるいはどちらでもよいのか）を明示する義務があります。

### 3 「何を書くか」を考える

レポートを書くための最初の手順は、与えられたテーマについて、何を書くかを考えることです。

「報告」型のレポートは、たいていの場合、何を調べて書けばよいかはすぐわかります。「報告」型の難しさは、何を書くべきかを決めるのではなく、集めた情報を過不足なく整理して、まとめ上げるところにあります。

これに対して、「主張」型のレポートの場合には、まず自分の主張を考えないといけません。また、何に対して自分の主張をすればよいかということ自体がはっきりしない、大きなテーマが与えられることもあります。

自分の主張であるからといって、何を主張してもよいというわけではありません。与えられたテーマの中にある重要なポイントをやさしく見分けて、そのポイントについて自分の主張を展開しなくてはなりません。最初に思いついたからとか、議論がしやすいからといった理由で、どうしてもよいポイントについてレポートを書いてしまうと、いくらきちんと書いても、高い評価はもらえないことになります。

#### アドバイス 2

「何について書いてあるのか」も重要な評価対象になる。何でも書けそうなテーマの時ほど、書く内容を慎重に選ぼう。

では、どのようにして書くべきポイントを見分ければよいのでしょうか。レポートは、何かの講義の課題として出るはずですが、ということは、まず、講義の内容とレポートのテーマがどのように関係しているかを考えてみなくてはなりません。講義にきちんと出ている人は、自分の主張を展開すべき重要なポイントを、講義の内容からしぼることができるはずです。

しかし、講義によっては、発展的な課題としてレポート課題がでるため、講義とレポートのテーマとは直接関係がなくなる場合もあります。この場合には、重要なポイントを外さないために、テーマについての下調べを十分にする必要があります。そして、重要なポイントがある程度見極めてから、そのポイントについて自分の主張を考えなくてはなりま

せん。このタイプのレポートは、「論文」と呼ばれるものに近く、より時間をかけて準備する必要があるわけです。

### アドバイス 3

どのポイントに対して自分の主張をするのかを考えるときには、まず講義との関係を考えよう。

## 4 信頼できる情報を入手しよう

報告型であれ、主張型であれ、レポートは、「信頼できる情報」に基づいて書かなくてはなりません。では、「信頼できる情報」とは何でしょう。大学のレポートで「信頼できる情報」として扱うことのできるものは2つあります。1つは、1次資料と呼ばれるものです。文学の場合の「作品」、歴史の場合の「史料」、



社会科学の場合の「データ」、法律学の場合の「条文」や「判決文」などがこれに該当します。もっとも、大学のレポートでは、新聞の記事や専門家によって引用・要約された資料やデータなど、厳密には1次資料とはいえないものも、多くの場合信頼できる情報として扱われます。もう1つは、専門家による自分の専門に関する議論です。もっとも、専門家とは何かというのは、難しい問題です。実は、講義を聴いてもらったり、レポートを書いてもらったりする理由の1つは、誰が「専門家」で、どれが「信頼できる情報」なのかをきちんと見分ける目を養ってもらうことにあります。したがって、どのような情報源から得られた情報に基づいてレポートを書いたのかという点は、レポート評価の重要なポイントなのです。

### アドバイス 4

1次資料または専門家の議論だけが  
信頼できる情報である。

逆に、信頼できない情報として、特にあげておきたいのは匿名の情報です。例えばインターネット上にある情報の多くは、出所の明らかでない匿名の情報ですので、いかに正確に見えても、信頼できる情報としてレポート中に使用することはできません。例えば、Wikipediaや匿名のホームページやブログ、あるいはYahoo知恵袋などから得た情報は、きちんとした引用の形式に従っていても、レポートの情報源としては不適切です。

さて、こうして信頼できる情報と信頼できない情報を区別する方法がわかっても、実際に信頼できる情報を手に入れられなくては意味がありません。たくさんの本や雑誌、データベースの中から自分の必要な情報を発見するにはいろいろなテクニックや方法があります。図書館のガイダンスや各学部の情報検索についてのガイダンスをよく理解して、自分の必要な情報を自由に引き出せるようにしてください。

**アドバイス**

**5**

情報を検索し入手する技術は、  
レポート作成に必須である。

## **5** 情報源をはっきりさせよう

レポートが信頼できる情報に基づいて書かれていても、それが読む人に伝わらなくては意味がありません。したがって、レポートには、情報源をきちんと示す必要があります。

何かの情報源から得た情報を利用することを「引用」といいます。正しい形式で引用をすることは、レポートを書く場合に最も重要なことです。正しい引用の形式が整っていない文章は、レポートではなくただの盗作です。これは、大学のレポートだけではなく、文章を書く場合に絶対やってはいけないことです。正しい引用をすることは、他人の文章や議論を使わせてもらうために必要な手続きであり、礼儀なのです。

**アドバイス**

**6**

他人の文章は、正しい引用の手続きを踏んで利用しよう。

では、引用の方法を説明しましょう。引用のポイントは、2つあります。まず、引用部分をはっきりさせることです。引用部分が短い場合には、「 」(かぎっこ)の中に入れます。長い場合には、引用部分をインデント(字下げ)します。また、他人の議論を要約して引用する場合には、「 」やインデントは使いませんが、その代わりに、「○○によれば、」といった引用部分を示す言葉を必ずつけて、混乱が起こらないようにします。引用についての2番目のポイントは、引用をした元の文献を示すことです。これを出典指示といいま

す。この場合、レポートの「本文のどの部分」が、「参考にした文献のどの部分」の引用であるかがわかるような形で指示することが必要です。図には、この2つのポイントを満たす引用の一例が挙げてありますので、参考にしてください。

それでは、小泉政権以前の日本における政治とテレビの関係はどのようなものだったのだろうか。戦後政治におけるテレビの役割を分析した星浩によれば、「自民党の『傍流』から誕生した政権は、メディア、特にテレビ対策に心を砕く」（星・逢坂2006、58ページ）傾向があり、主流派から誕生した政権は、「テレビ対策に依存する割合が少ない」（同上、58ページ）ことを指摘している。したがって、自民党内での基盤が弱かった小泉首相が、テレビに露出することによって、自分の政策を実現しようとしたことは、これまでの政治とテレビの関係の延長線上にある現象であり、小泉首相だけに見られる現象ではない。

それでは、小泉首相の独自性はどこにあるのだろうか。まず指摘できるのは、小泉首相のテレビ政治に対する理解の深さである。田原総一郎は、「ワグネル・ポリティクス」という批判に対して、小泉首相が、次のように発言したことを紹介している。いくつも話すと、もっとも不快な部分を拡大して報じられる。1つのことしか言わなければ、どのメディアも仕方なくそれを報じる。（田原2005、65ページ）

この発言に見られるように、小泉氏は、90年政治的な経験を通して、テレビというメディアの効な活用方法をよく理解しており、それを巧用したのだと考えることができる。

3. 結論  
以上論じてきたように、小泉政権におけるテレビ政治には、自民党内傍流の政権による政策実現の手段という、戦後の「テレビ政治」の特徴を引き継いでいる面がある。他方で、その露出とパフォーマンスの徹底性は、小泉氏自身の経験とパフォーマンスによる部分が大きい。したがって、小泉政権期のテレビと政治の関係だけを見て、日本の政治におけるテレビの役割が変わったと結論づけるのは、難しいと思われる。

【参考文献】  
川崎泰資(1997), 『NHKと政治』, 朝日新聞社  
谷藤悦史(2005), 『現代メディアと政治』, 一藝社  
田原総一郎(2005), 『日本の戦後 下巻』, 講談社  
星浩・逢坂(2006), 『テレビ政治』, 朝日新聞社

引用した部分は、すべて「」に入れます。

参考文献リストの本の何ページからの引用かわかるようにします。

引用したところは、すべて引用指示をします。

引用部が長いときは、インデント(字下げ)をします。

参考文献リストは、レポートを書くのに使った本について、著者名・出版年・書名・出版社の情報を一覧表にします。

実は、引用のしかた、特に出典指示の方法には、分野ごとにいろいろなやり方があります。講義での指示をよく聞き、自分が読んだ文献の引用のしかたを参考にして、自分が専門とする分野で使われているやり方を身につけてください。

## 6 適切な分量と構成で書こう

レポートは、適切な分量をもった、適切な形式と表現の文章でなくてはなりません。分量に関しては、レポートの課題とともに目安の文字数が示されるはずですが、文字数ぴったりである必要はありませんが、±10%以内の字数で書くことが原則です。また、表題をつけること、「だ・である」調で書くこと、書き言葉として適切な表現を使うこと、読みやすい字で書くこと、これらはレポートを書く場合の常識です。手書きにしなくてはいけな

いのか、ワープロを使ってよいのかもきちんと確認しておきましょう。

次に、レポートの構成について簡単に説明しておきます。いろいろな構成のしかたがありますが、最も簡単なものは、序論－本論－結論の3段構成にすることです。レポートのほぼすべては、この構成で書くことができます。

「序論」では、このレポートの中で、何が書かれるのかを簡単に説明します。報告型のレポートの場合、ここには、テーマの概要と説明の順番くらいしか書くことはありません。しかし、主張型のレポートの場合には、自分がどのようなポイントに対して主張を展開するのか、なぜそのポイントが重要なのか、といったことをここに書く必要があります。そして、その内容も重要な評価ポイントになります。

「本論」は、レポートの中心的な部分です。報告型の場合、ここに集めた情報を整理してまとめていきます。報告型の場合には、「情報の整理」そのものが重要な評価のポイントになります。大量の情報のなかから、重要で信頼できる情報をいかに的確に選び出して、読みやすい形に整理しているか、が評価の分かれ目になります。調べた順に書き並べたり、重要そうだけど調べるのが面倒な項目を抜かしたり、情報の信頼性をきちんと評価していなかったりするレポートは、評価が低くなります。

主張型の場合、まず自分の結論とその根拠を明示する必要があります。理由の示されていない主張は、そもそも議論として成立していません。次に、主張型の場合には、自分の主張をサポートする証拠をこの部分で提示することになります。例えば、「この作品では、それ以前に比べて厳しい自然の描写が増えており、筆者の自然観が変化したことがわかる」という主張をサポートするためには、実際に「厳しい自然の描写」が増えていることを筆者の作品を引用することによって示さなくてはなりません。また、「消費税の税率を上げることは日本経済に悪影響を及ぼすので、消費税の税率を上げるべきではない」という主張をサポートするためには、「消費税の税率を上げることが、日本経済に悪影響を及ぼす」ことを具体的なデータや専門家の議論から示さなくてはなりません。小中学生の頃の作文や読書感想文の名残で、自分の経験を根拠にしようとする人がいますが、それでは他の人に納得してもらえない根拠にはなりません。他の人が自分と同じように考えてくれる保障はどこにもないからです。さらに、「明らかであろう」、「いうまでもない」という表現で証拠の提示をサボったり、「らしい」、「といわれている」といった形で証拠を示さないのも、レポートとしては失格です。

最後の「結論」では、このレポートの内容を簡単に要約します。報告型の場合には、本



論でまとめたことなかで、特に重要と思われる部分を再度整理します。主張型の場合には、自分の主張と理由、そしてその根拠について簡単に要約します。「これからもこの問題について考えていきたいと思います」といった、レポートを執筆した感想を結論部分に書く人がいますが、レポートの結論は、あくまでも本論で議論したことを整理すればよく、感想を書く必要はありません。

**アドバイス 7** レポートの構成は、序論－本論－結論を原則にしよう。

## 7 執筆の前後に

いよいよ執筆です。材料が集まったからといって、レポートをいきなり書き始めてはいけません。上で述べた構成を元に、自分の調べた材料をどのように並べるかを考えてください。レポートの構成をきちんと考えずに書き始めると、途中で議論が続かなくなったり、途中からおかしな方向に向かったりします。レポートを書くのに時間がかかるのは、単に調べが不足していて材料が少ないか、または、構成が十分に練られていないかのどちらかです。十分な材料に基づいて、きちんと構成を考えてから書き始めれば、書き上げるのにそんなに時間はかかりません。

**アドバイス 8** 執筆の前にレポートの構成を練ろう。

みなさんのレポートで目につくのは、内容以前にそもそも日本語として不適切な表現や文章です。引用の問題以外でも、『『である』体の文章の中に『です・ます』体を混ぜてしまう』、「段落を作らない」、「読点（、）を打たない」、「話し言葉を使う」、「主語と述語が対応しない」、「『これ・それ』などの指示語が指す内容が不明確である」など、ちょっと考えただけでもたくさんの例を挙げることができます。こうした不適切な文章は、執筆中にも注意しなくてはなりませんが、それだけではなかなかなりません。自分が文章を書いたら、自分で読んでみておかしな部分を修正してください。この作業のことを「推敲」と呼びます。最低3回は推敲してください。また、自分で推敲した後で、さらに他の人にも読んでもらうと、自分では気がつかなかった問題点を発見してもらうことができ、不適切な表現はさらに減るでしょう。

**アドバイス 9** 自分の目と他人の目をフル活用して推敲しよう。

## 8 レポートを書くのに失敗する最大の原因は・・・

これまで見てきたように、大学でレポートの執筆には、それなりのエネルギーと時間が必要です。みなさんがレポートを書くときに犯す最大の失敗は、「すぐ書ける」と思ってしまうことです。大学で要求されている水準のレポートを、1晩で書くことはできません。それどころか、丸1日使っても十分なものは書けないでしょう。1晩や1日で書ける課題が何週間も前に出されているわけがないという、ちょっと考えれば当たり前のことを忘れないでください。きちんと時間をかけて、周到的な準備をしたレポートだけが、高い評価を得ることができるのです。

### アドバイス 10

レポート作成には意外に時間がかかる。  
すぐ準備に取りかかろう。

### 【参考文献】

レポートの書き方については、この短い文章では触れることのできなかつた重要な原則やテクニックが、まだまだたくさんあります。例えば、以下の本にはここに書けなかつた重要なことが、具体例とともにあげられていますので、参考にしてみてください。レポートの書き方それ自体も、大学で学ぶべきことの1つです。自己流に走ったり、適当に書いたりせず、正しい書き方を身につけてください。

戸田山和久、『論文の教室』、NHK出版

アンソニー・ウェストン、『論理的に書くためのルールブック』、PHP

木下是雄、『理科系の作文技術』、中公新書

山内志朗、『ぎりぎり合格への論文マニュアル』、平凡社新書

# 第6章 授業における他者理解と自己表現

## 1 生活集団と学習集団

これまであなたたちはいくつもの教室のなかで授業を友だちとともに受けてきたはずですが、その授業をいっしょに受けてきた集団とはどのようなものだったのでしょうか。

学校のなかでの子どもたちの集団にはいろいろなものがあります。ホームルームのような生活集団もあれば、授業に対応する学習集団もあり、特定の文化・スポーツにとりくむクラブ・部集団もあります。

こうした観点からみると、小学校のクラスは生活集団であると同時に、学習集団です。特定の教科において生活集団とは異なる特別の学習集団がつくられるということがありますが、授業は基本的に生活集団を単位としておこなわれます。ですから、学習集団をつくることは一般的に生活集団をつくることとしておこなわれます。

これにたいして高等学校では、生活集団と学習集団は別個のものであることが多い。生徒たちは生活集団であるホームルームに所属しながら、教科・科目ごとの学習集団に分かれていきます。ですから、学習集団は生活集団を異にする生徒から編成されることが多いのです。高校によっては、生活集団であるホームルームが実質的には存在せず、学習集団が教科・科目ごとに、また習熟度別に編成されるということもあります。

このために、多くの高等学校では、その教科・科目ごとの授業をつうじて協同して学ぶ力をもつ「学習集団」をつくりだしていかなければならないのです。そればかりか、それを介して生徒たちの生活集団をその外側に生み落としていくことが課題となります。なぜなら、生活を共有する仲間・友だちや、興味や関心を共有するサブグループを導きだすことを抜きにして、協同して学ぶ学習集団をつくりだしていくことがむずかしいからです。

これと同じことが大学についてもいうことができます。大学にあっても、学生は自分が選択した講座・ゼミごとの学習集団に属し、授業時間ごとその学習集団をとり代えて授業を受けます。

このようになっているのは、大学のカリキュラムが学生一人ひとりに科目選択・教員選択の自由を認め、それをつうじて学生が自分固有の学びのカリキュラムをつくることができるようにしているからです。

だが、このようなカリキュラムは個々の授業・ゼミごとに学習集団を編成するために、「協同して学ぶ」ことを本性とする学習集団をつくりだすことがむずかしくなります。

たしかに興味や関心をおなじくする学生が集まっているのだから、学習集団をすぐにつくりだせそうですが、実際はかならずしもそうなりません。逆に、そのシステムは、自分さえ勉強ができればよいという「学びの私化」を強めて、一人ひとりの学びを協同学習へと組織していく「学びの協同化」を弱めてしまうからです。

このために、大学も、授業やゼミがその学習をつうじてともに学びあい、ともに教えあう「学びと教えの共同体」をつくりだすとともに、学科や専攻のなかに生活を共有しあうコミュニティを生み出していかねばならないという課題に取り組まなければならなくなっています。また、逆に後者をつうじて前者を導き出していくことも必要とされることがあるのです。

## 2 教室の中に友だちをつくる

それでは学生は、教室を「学びの共同体」または「学習集団」にするという、この課題にどのように関わっていけばいいのでしょうか。

あなたたちは小・中・高と授業を受けてきましたが、その授業にどう参加し、どのような学習集団をつくってきたのでしょうか。

通常、授業とは、一人の教員が複数の生徒にたいしておこなうものです。一人の教師が一人の生徒を相手にして授業をするということはないわけではありませんが、それはあくまでも例外であって、生徒は複数で授業を受けるというのが通例です。

だが、「複数で授業を受ける」とか、「複数で授業に参加する」ということはどういうことなのでしょうか。

それには二つの場合が考えられます。ひとつは、この複数の生徒がたがいになんに関わりもなく、一人ひとりバラバラに授業を受けている場合です。ここには、「教師⇒生徒個人」という関係はあっても、「生徒⇔生徒」という関係はありません。だから、そこでは、みかけは複数の生徒相手に授業がおこなわれていても、生徒は他のもの（他者）と関わることなく、一人ぼっちで授業を受けているだけということになります。

大学でも、ときにそんな印象をもたざるをえないときがあります。講義を受けている学生は一人ひとり別々にガラス箱のなかに閉じこめられていて、教壇から個々のガラス箱に配線されている電話回線をつうじて講義を個別的に受けているといった印象です。

このような場合、その教室には複数の学生からなる学習集団は存在しないといわざるをえません。

いまひとつは、学生が互いに異なる考えをもち、互いに交流しあう複数者として授業に参加している場合です。ここには「学生⇔学生」という関係があります。したがって、ここでの学生たちは、「(学生⇔学生)⇔教師」という関係、または「学習集団(学生⇔学生)⇔教師」という関係を取りむすんで講義やゼミに参加しているということができます。

ところで、いま前者にあつては、学生が授業を「受けている」といい、後者にあつては学生が授業に「参加している」といったことに注意してください。このように言い分けたのは、学生が他者との関わりもないまま教室にあるときは、授業を受動的に「受けている」ことが多いのにたいして、他者との関わりあっているときは、授業に能動的に「参加している」ことが多いからです。前者にあつて学生は授業の受身的な客体になることが多いのにたいして、後者にあつては学生は教師とともに授業の一方の主体となる可能性が高いからです。

このようにみえてくると、他者と関わることなく一人ぼっちで授業を受けているよりは、友だちをつくり、グループを組んで授業やゼミに加わっているほうが、教師との関係においても、学生同士の関係においても、活力のある教えと学びをつくりだすことができるっていいのではないのでしょうか。

そのためには、学科や専攻のなかに生活をともにする生活集団をつくりだしていくことも考えなければならないでしょう。いまは全員が集まってコンパや合宿をするということはあまりないようですが、興味や関心をともにする仲間ごとに、またサブカルチャーをともにするサブグループ（「系」や「族」）ごとに日常的な交流をふかめ、それを基盤にして授業やゼミに参加することがもっと試みられていいのではないのでしょうか。





### 3 授業づくりにどう参加するか

さて、友だちをつくって授業に参加することが大切だといいましたが、授業に参加するとはどういうことなのでしょう。

結論を先取りしていうと、それは教師の授業づくりに参加し、教師とともに授業をつくっていくことです。

教師が授業をおこなう場合、教師は大別して三つの役割を果たさなければなりません。

その第一は授業内容の指導です。授業の内容をどのように構想し、それをどのように学生に提示していくかということです。第二は、すでにのべてきたように、教師の指導に応答しつつ、友だちと協同して学ぶ力をもつ「学習集団」づくりあげることです。第三は、授業のなかでの教師と学生、学生と学生の対話・討論を発展的に組織していくことです。

教師はこれらの三つの面において主導権を発揮していかなければならないことは当然ですが、これらはいずれにおいても学生の協力がなければよい結果を生み出すことができないのです。学生の授業づくりへの参加がなければ、授業は空転し、学生のものにならないからです。

そうした授業では、教師だけがアクター（演者）で、学生は観客ということになります。教師だけがもっぱら知識・技能を伝授し、学生はもっぱら知識・技能を受容するだけということになります。これでは、そのなかの「学び」はこれまで君たちが経験してきた「(受験)勉強」と同じものになってしまいます。

授業というものを受身的な「受業」にするのではなく、学生にとって創造的な「学び」にするためには、学生自身が「聞く」ものであるだけでなく、「問う」ものとして立ち現れなければならないのです。「問う」ことなしに、ふかく「聞く」こともできないからです。そのためには、まずは「授業で分からなかったことを聞く」ことから「問う」ことをはじめることです。授業が終わると、学生が一人でやってきて、「このところがわからなかった」と質問してくることがあります。これができれば、つぎには一人ではなく、友だちと連れ立って質問することです。さらには、授業が終わってからではなく、授業中に質問してよいか尋ねて、授業中に質問することです。

そうなると、一人の学生の質問は彼・彼女だけのものではなく、みんなに開かれた問いとなります。そればかりか、その質問によってみんなが「聞く」ものとなると同時に、問うものとなり、一人ひとりがどのように教師の説明を聞いたかがみんなの問題となってい

きます。こんなことが一つの契機となって、教室のなかに学習集団が生まれていくのです。これを例にして考えると、問い方にもいろいろあることがわかってくるでしょう。どのような問い方・聞き方があるか考え合ってみてはどうでしょうか。

そのなかには、こんな問い方もあるにちがいません。「先生はなぜこの学問をするつもりになったのですか」「あのような意見や主張をお持ちになったのはどうしてですか」「なぜフィールド・スタディを大切にするようになったのですか」などの例が考えられます。

もちろん、こんなことはフォーマルな場で問い・聞くよりは、コンパとか研究室での雑談のなかでしたほうがよいにきまっています。こうしたことが学生と教師の間で交わされるようになれば、授業やゼミの場でも「なぜこれを学ばなければならないのですか」「これを学ぶのはどういう意味があるのでしょうか」という問いも発することができるのではないのでしょうか。

#### 4 対話・討論へ——授業における他者と自己

このように授業外での教師との問答を授業内にもちこんでいくことが大切だとしても、授業のなかで発言することはそんなにやさしいことではないはずです。

だが、なぜあなたたちは授業のなかで発言することをためらうのでしょうか。これについて話し合ってみてはどうでしょうか。自分の発言に自信がないためなのでしょう。それとも、自分の発言が他の人たちに受け入れられることがないと思い込んでいるためでしょうか。まちがったことをいって、笑われるのはいやと考えているからでしょうか。

ですが、学生の多くは同じ教室にいる友だちが授業をどのように聞いているのか、なにを考えているのか、どういう発言をするのかに深い関心を持っています。友だちの報告や発表を聞いて、自分の考えを確かめたいとも思っています。だから、作法としてだけでなく、心から友だちの発言や発表に拍手を送ることがあるのではないのでしょうか。

ところで、友だち（他者）が発言するとき、自分の側に「聞く」という責任と、それに「応答する」という責任が生じてきます。他者の発言を聞くものは、彼・彼女がどのような立場からなにを言おうとしているのか理解する努力をしなければならないのです。その是非を即座に判断し、誤答であれば無視し、正答であれば鵜呑みにするという態度をとってはなりません。

また、自分とはちがう意見だと思い込んで、一方的に反論するという過ちをおかしては

なりません。ものごとを単純に二項対立的に考えるとき、大切なものを見落とすことがあるからです。

学習集団にあっては、他者が自分とは異なる意見をのべることになによりも寛容であることが求められます。だれもが同じ経験をもつものではないのです。一人ひとりが異なる生活と学びの経験・履歴をもつものとして教室のなかにいるからです。

その一人ひとりが自己の経験をふまえ、自分の学びの履歴にもとづいて自分の考えを表現することのなかに、学問することの自由があり、大学の自由があるのです。

また、聞くものには、他者の自己表現に照らし出されてくる自己の意見を述べることでもって、他者に応答することが求められます。他者理解が自己認識を深めるのです。その自己認識が新しい自己表現を可能にするのです。学びにおける「仲間づくり」は新たな「自分づくり」を促してくるのです。

ところで、その応答は他者の発言に付け加えの意見をのべるものであったり、それにたいして異議を唱えるものであったりするでしょう。そのいずれの場合においても、応答は、他者がなにを言おうとしているのかを自分のなかで確かめたうえでの発言である方が好ましいのです。

しかし、これを意識しすぎて発言を取りやめてしまうのは好ましいことではありません。誤解のうえでの応答であっても、それが他者のさらなる応答を引き起こし、すれちがいを対話にレベル・アップすることがあるからです。そうするのが教師の学習集団にたいする責任でもあるのです。このようなすれちがいや理解不足を含みつつ、教室のなかで交わされていくコミュニケーションがあなたたちを学びにおいて協同する「学習集団」へと組織していくのです。

そのなかで、「あなたはいまこういったが、それにつぎのような意見を付け加えたい」とか、「あなたはこのような主張をしたけれども、私にはつぎの理由から納得ができない」とか、「それがあなたにとってはそういう意味があるにしても、あなたとは異なる人にとっては別の意味があるのではないか」とかいった発言が生まれてくるのです。

その内部に他者のことばを取り込み、それとの内的対話をふくんでいる発話するとき、それに応答する発話が返されてくるのです。つまり、そこに相互応答的な対話が生まれてくるのです。

そうなると、教室は出会いと対話と討論の空間になっていくのです。この他者との出会いと対話と討論のなかで、私たちは知識・技能を介して自分たちの生活現実を見直し、読

み替えていくのです。また、自分（たち）が埋め込まれてきた生活世界を読みひらき、自分（たち）にとって必要な世界とはなにかを問うようになり、自分たちが「生きるに値する世界」を立ち上げることができるようになるのです。

ここにおいて学習は孤独な「勉強」ではなくなり、「仲間づくり」と「自分づくり」を交わしつつ、「世界づくり」へと向かう「学び」となるのです。

MEMO

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

# 第7章 キャリアデザインと大学の学び

## 1 はじめに一キャリアデザインとは一

これまでの皆さんの生活のなかでは、「キャリアデザイン」という言葉は馴染みのうすい言葉かもしれません。でも少し気をつけてみると、最近では新聞やテレビのニュース、書店の本棚などで「キャリアデザイン」とか「キャリア形成」という言葉がよく目につきます。これは、複雑化、多様化する現代社会にあって、個人の「キャリア」というものに注目が集まってきた、あるいは見直されてきたためと考えられます。ここでいう「キャリア」とは、職業上必要とされる能力のことです。企業等の職場においては、経済のグローバル化や競争の激化にともなって職業上求められる能力も高度化、専門化しています。同時に終身雇用が原則であった雇用形態も多様化しており、これからの社会は、ますます個人としての力量が問われる時代になってきたと考えられます。終身制雇用のもとでは、企業が社員を教育し、時間をかけて一人前に育てていくというやり方が一般的でした。ところが終身制雇用の原則が崩壊し、企業間の競争が激化した現代社会においては、職業上必要な能力は、みずから学び獲得するという姿勢が求められるようになってきたのです。

「キャリアデザイン」をもう少しよく理解するために、「キャリア」という言葉について考えてみましょう。英語では、Career と綴り、本来は車輪の轍（わだち）を意味する言葉ですが、今日では、「学歴」「経歴」「職業」「進路」など、人の歩みや歴史を示す言葉として使われています。「キャリア」には、先に述べた職業上の能力とは別に、生涯にわたるライフスタイルや、職業とは関係のない経験やその経験によって得られたスキルなどの意味があります。文脈によって様々な意味をもつ言葉ですが、概ね以下の4つに分類できるのではないのでしょうか。

- ①職業を通じて得た経験、地位、能力など
- ②高度に専門的な職業（または職業上の能力）
- ③生涯にわたる生き方（ライフスタイル）
- ④職業とは関係のない経験やその経験によって得られたスキルなど（主婦としてのキャリア、親としてのキャリアなど）

大学生活において、就業経験のない皆さんに対して「キャリアデザイン」というときは、



③の要素が強くなり、場合によっては「ライフデザイン」といった方が分かりやすいかも知れません。しかしこの場合も、当然ながら職業選択とは深く関わっています。あえて定義するなら、「職業選択を含めたこれからの生き方、人生をよりよく生きるための将来計画」ということになるでしょうか。大学生活を、将来の自分と直接関わりあるものとして捉えることができれば、「キャリア」形成を意識した学生生活を送ることが重要だと気づくことでしょう。将来に向けた準備をする時間が限られているということから言えば、この気づきは早いに越したことはありません。しかし同時に大学での4年間は時間をかけてゆっくりと自分を見極め、将来を考えることができる貴重な時間です。矛盾しているようですが、要はあまりに急いで目標を決めてしまうべきではないということです。

さて、職業上の能力としてのキャリアにもふたつの側面があります。ひとつは、仕事と密接に結びついた知識やスキルであり、専門的な仕事に就くための資格や仕事を続けるうちに経験的に身につく力を指す場合です。例えば教職や司書、学芸員、公認会計士、司法書士、弁護士などの資格はこれにあたります。今ひとつは、みずから考え、学ぶ態度や意欲、やる気などのように、職種とは関係なくどのような仕事にも共通して求められる基礎的能力という側面です。前者は「専門的職業能力」であり、在学中に専門的資格を取得する場合を除けば、多くの場合は就職してから身につけていくものでしょう。しかし、後者の「基礎的能力」は、大学での学びを通して、今から磨くことができるものです。この基礎的能力を開発、獲得できるかどうかで、4年後に形成される「キャリア」は大きく変わってくるでしょう。この章では、「キャリアデザイン」について、この基礎的能力との関係をふまえて述べてみたいと思います。

## 2 キャリアデザインと自己認識

皆さんの多くは4年後には大学を卒業し、社会に出て働くことになるでしょう。ただし、入学直後の1年次春の段階では、将来の職業までイメージできている人、言い換えれば将来の目標を明確にもっている人は少ないと思います。現代社会においては大学を卒業した若者が3年以内に職を離れる率は30%を超えており、しかもその半数が1年以内に職を変えているといわれています。間違いのない職業選択をし、職業との不適合を防ぐためには、自分をよく理解するという姿勢が不可欠です。自己理解を深めた上で業界研究、進路選択へと進むことが求められているのです。では、職業選択はどのようなプロセスを経て、どのように進めるべきなのでしょう。この項では、職業選択を含めたキャリアデザインと

自己理解および自己同一性（アイデンティティ）との関係を述べてみたいと思います。

人間は誰しも、その人なりの自己理解を自分の内に持っていると考えられます。漠然とではあるが、自分の長所や短所をよく理解し、今までの生き方とこれからの生き方が明確で一貫性がとれており、しかも周囲の人もそのような自分を受け容れ、認めてくれている。このような人は、自己一貫性がとれており、ある程度自己同一性（アイデンティティ）が確立された状態にあるといえるでしょう。しかし、成長期にある皆さんにとって自己一貫性を保つのは極めて難しい課題であると考えられます。自己理解とそれに伴う自己認識は、成長期には不安定であることが多く、確立途上にあるからです。自分では未だ気づいていない能力が潜在していることもあるでしょう。自分を振り返る都度、新しい発見があるのもこの時期の特徴なのではないでしょうか。このような時期の自己評価は常に定まらないかもしれません。しかし職業選択など、決められた答えのない課題に対応していくためには、不安定ではあってもその時々自分をよく知ることが出発点となるのです。

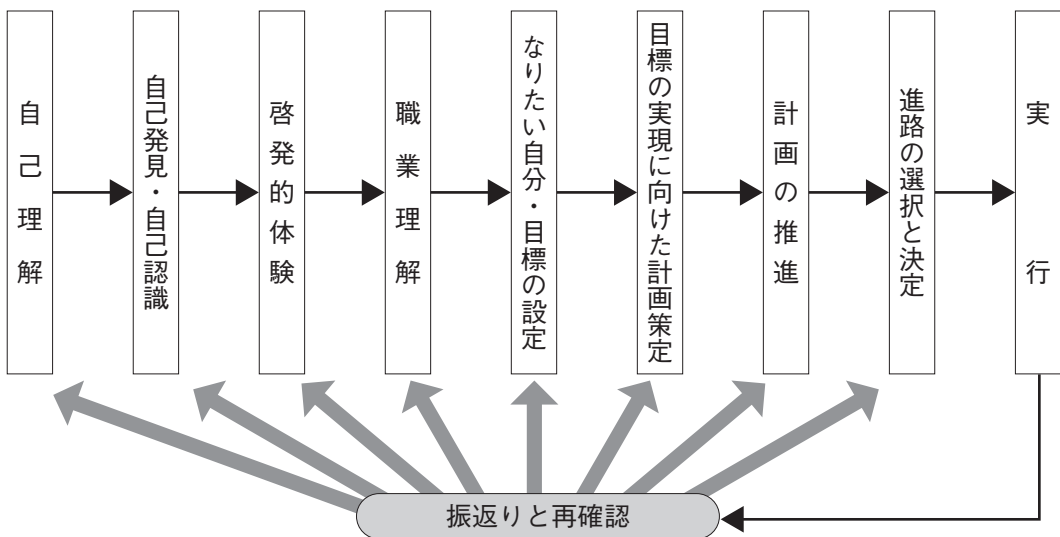


図1 自己理解を起点とするキャリアデザイン

図1は、自己理解を起点とするキャリアデザインの一般的な方法を示したものです。過去の自分を振り返って自己理解を深め、新たな自己認識をもとにして、将来の自分を描いていく手順を示しています。「啓発的な体験」には、例えばインターンシップのような就業体験があります。教員を目指している人にとってはスクールボランティアや教育実習なども職業選択の上では重要な体験になるでしょう。自己認識をふまえて職業研究や業界研究を行うことで、より具体的な目標を立てることができるようになります。やがて「なりた

い自分」が思い描けて目標が明確になると、今度は現在の自分とのギャップを埋めるために、何が必要なかを考え、なりたい自分に近づくための学習やスキルアップの計画を立てることが必要になります。その計画を推進することで、成長を実感して確かな手ごたえを感じられれば、目標の達成はぐっと近くなります。さらに具体的な職業選択、進路決定へと進むことができるでしょう。

実際には、職業研究を進める過程で新たな発見があって自己認識が深まったり、啓発的な体験をすることによって職業研究に対する新たな意欲が湧いてきたりすることもあるでしょう。大切なのは、常に振り返りと再確認を怠らないようにすることです。これらの作業を様々に思考錯誤しつつも繰り返し行っていくことで、視野を広くし、自分にふさわしい職業に就く可能性が高まっていくと考えられます。

### 3 大学の学びで身につく力とは—知識や技能を活かす力の存在—

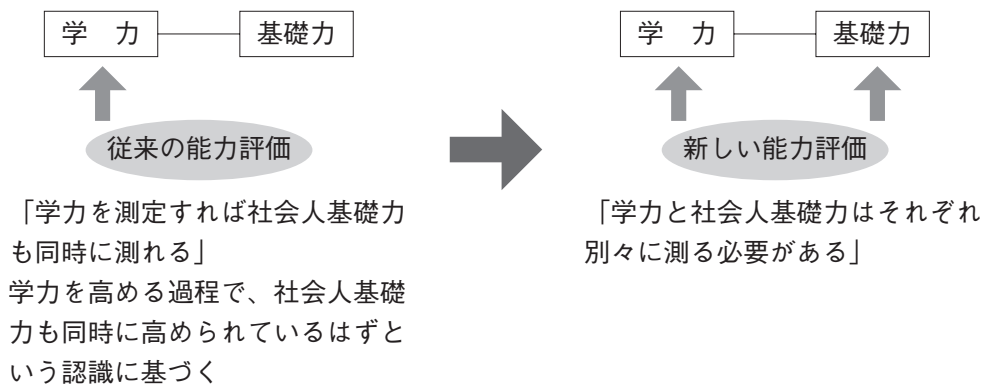
第一項（P52）では、キャリアの意味する職業上の能力には、二通りの側面があること、そのうち基礎的能力は、大学での学びにおいて今からでも磨くことができるものであると述べました。そのことについてもう少し深く考えてみましょう。大学の授業というとき皆さんはどのようなことを連想されるでしょうか。おそらくは高度に専門的な知識やスキルを習得することを思い浮かべるのではないのでしょうか。これも大学の授業の一面ですが、大学では、同時に高校までの学習内容の復習を行う授業や基礎的な授業も開講されています。学科によって多少異なりますが、1、2年次は英語などの語学をはじめ、教養総合科目を中心に履修します。多くの学科では、専門的知識やスキルを高める専門教育科目は3年次や4年次に配当されています。英語が卒業後の社会生活や職業生活においても必要であることは、皆さんも容易に理解できることでしょう。では、各学科の専門教育科目とそこで展開される学びは、将来皆さんが就く職業とどのように関わっているのでしょうか。例えば、日本文学科に入学して国語の教員を志す人や、法律学科の法律専門職専攻に入学して、弁護士や司法書士をめざす場合など、あるいは経済学科に入学してファイナンシャルプランナーを志望する場合などは、各学科の専門教育は将来の職業との関係が強く、授業にも自ずと興味ももてることでしょう。しかし、すべての日本文学科生が国語教員や研究者をめざしているのではないことも事実です。では、日本文学科に入学して一般企業への就職を考えている人にとって、日本の古典文学や伝承文化を研究する授業は意味がないのでしょうか。実はおおいに意味があるのです。日本文学科に限らず、演習やゼミなどの授業

で発表を行う際には、資料を探し、資料を読み、先行する研究を調べ、発表する内容を整理し、自分の言葉でわかりやすく伝えなければなりません。この学びの過程で求められる力は、探求心、情報収集力、読解力、論理的思考力、文章力、表現力などです。これらの力は、第一項で述べた職業上の基礎的能力と大きく重なり合うことがわかります。これは全ての学科の全ての授業に共通することだと思われます。大学の学びでは、基礎学力を高め、専門的な知識やスキルを身につけることも求められますが、これらの知識やスキルを的確に活用するための思考力や応用力、他者に伝達する能力、あるいは伝達したいという意欲や積極性などを高めることも同じくらい重要なのです。大学での学びで得た力を将来に活かすためには、授業ではより深い体験を求める積極的な姿勢が求められているといえるでしょう。授業と将来の自分との関係性がわからなくなり、授業に意義が見出せなくなったときは、ぜひこのことを思い出していただきたいと思います。

#### 4 社会で必要とされる力—社会人基礎力とは—

前項で述べたように知識やスキルを活用する能力、あるいは他者に伝達するための表現力や意欲などは、大学で磨くことができるものです。では、卒業後の実社会では具体的にどのような力が必要とされているのでしょうか。本項では、企業社会で必要とされる基礎的能力について説明します。近年の企業社会のIT化、グローバル化のなかで、企業間の競争が激化し、終身制雇用の崩壊とともに、従来よりも個人の力量が問われる時代になったことは先に述べたとおりです。そのような社会の変化をうけて「人間力」や「社会人基礎力」という言葉が、大学等の教育現場でもよく聞かれるようになってきました。「人間力」を提唱したのは、内閣府（2003年）、「社会人基礎力」を提唱したのは経済産業省（2006年）ですが、ここでは経済産業省の「社会人基礎力に関する研究会」報告をもとに、大学の学びとの関係を考えてみたいと思います。

従来、基礎学力は小学校、中学校、高校までに修得し、大学では主に専門知識を学ぶものとされてきました。そして学ぶ意欲や態度、実行力、思考力、表現力などの基盤的な能力は、基礎学力を固め、専門知識、スキルを習得していく過程で、自然に身につくものと考えられていたのです。ところが近年、学力はあるのに意欲や積極性に欠ける学生や、高い専門的知識やスキルをもちながらそれを応用できない若者が増えてきたことが指摘され、学力と基礎的能力との相関は必ずしも高くないという考え方が一般的になってきました。



(2006年2月経済産業省「社会人基礎力に関する研究会」報告書より)

図2 新しい能力評価

経済産業省は、事態を憂慮する産業界の要請を受け、2006年2月「社会人基礎力に関する研究会」報告書を作成しています。報告書によれば、「社会人基礎力」は職場で働くために求められる基盤的能力として説明され、【図3】に示す3つの力と要素から成ると定義されています。

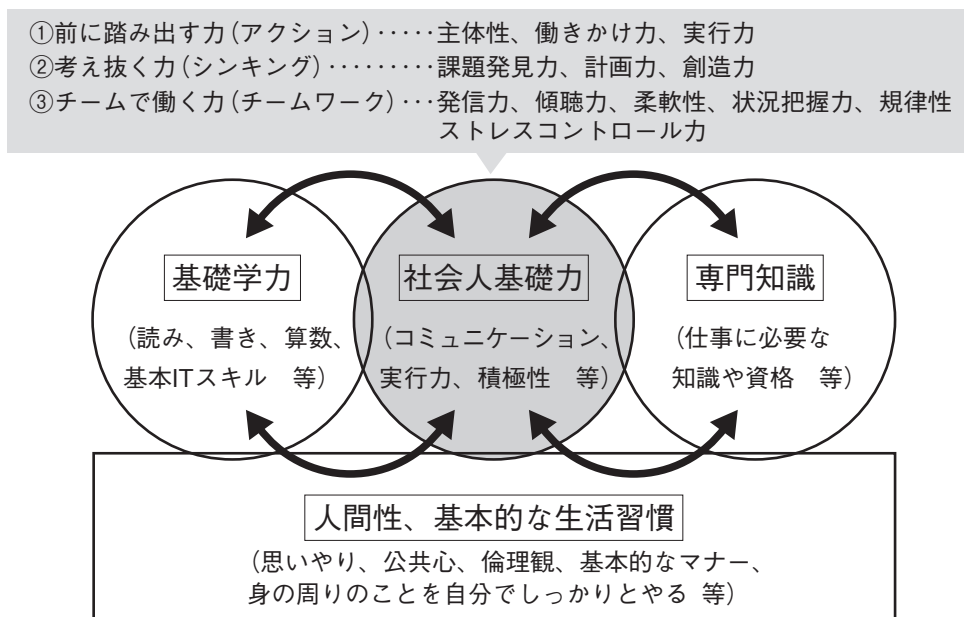


図3 社会人基礎力 (2006年2月経済産業省「社会人基礎力に関する研究会」報告書より)

この社会人基礎力の構成要素は本章の終わりにさらに詳細な表をつけてあるので参照してください。これらの力は、一般的に人間として備えるべき能力であるともいえますが、社会で知識やスキルを存分に発揮するためには、確かに役に立ちそうです。また第一項



(P52) で述べた職業上の能力としてのキャリアを形成していく上でも、その原動力となるものではないでしょうか。同時に前項で述べた大学での学びにおいて求められる力とも非常に相関が高いといえます。

こうした企業社会の要請や産業界の動きは、企業等の採用の現場にも反映され、近年では、採用面接時にグループディスカッションを行って、人の意見を聴く力、自分の意思を表現する力など学力では測れない能力をみる方法が主流になってきました。

## 5 「自分史」作成とキャリアデザイン

國學院大學は、学生支援の一環として、早くから学生の自己理解を深め、キャリアデザインを意識してもらうことに取組んできました。平成19年度には、「学生みずから発信する『自分史』作成支援—社会のなかでの自己活用力養成プログラム—」を推進することを企画しました。この取組みを、平成19年度文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に応募したところ、長年にわたり真摯に学生支援に取り組んで来たことが評価され、採択されることができました。文部科学省の推進する「新たな社会的ニーズに対応した学生支援」は、ニート・フリーターの増加や若年層の失業率が高い現代社会の課題を解決するため、若者の自立を支援するプログラムです。本学が、学生のキャリア形成をめざして計画した「自分史」作成と、文部科学省のめざす若年層の自立支援は、その目的において共通する取組みであるといえるでしょう。

### 学生みずから発信する「自分史」作成支援

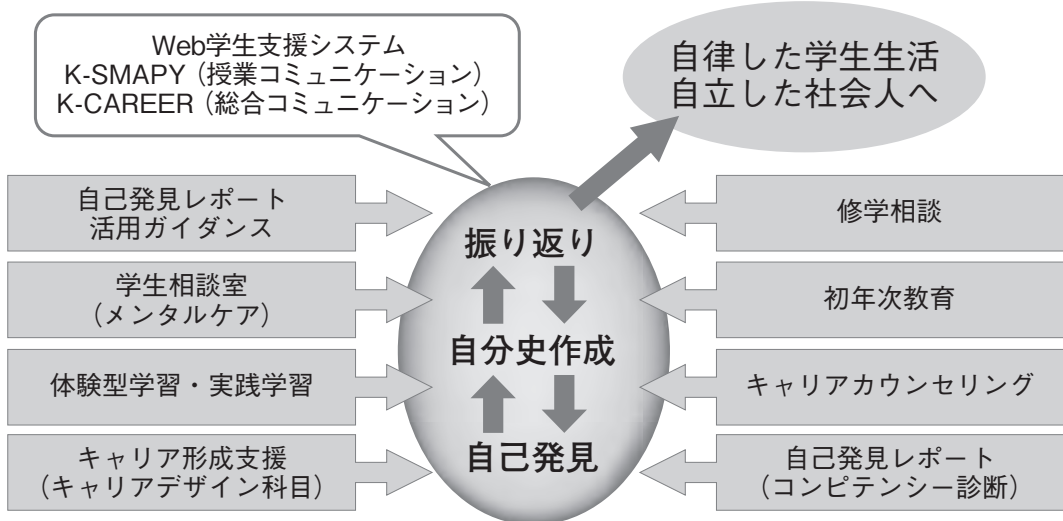


図4 「自分史」作成を軸としたキャリアデザインのイメージ



【図4】は、本学の推進する「自分史」作成支援のイメージです。各種のアセスメント（評価）や教職員との面談、さらにはキャリアデザインを支援する授業等を通じて、学生が振り返りと自己発見を繰り返すことを図式化しました。こうして自律した学生生活を送り、自立した社会人として巣立つ過程を表しています。本学では「自分史」作成を支援するため、1年次の入学直後に自己発見レポート「コンピテンシー診断」を実施し、5月には活用ガイダンスを実施することで、自己理解を深めてもらう取り組みを進めています。また専任教員による初年次教育では4年間の過ごし方と専門教育への導入が主要なテーマとなります。修学相談やキャリアカウンセリングは、専任の教職員との面談によって行われ、自己理解を深めるために、他者からの評価を受ける良い機会となっています。キャリアデザインを目的とする授業科目やガイダンス、Webシステムによるデータの提供等が行われています。

上記の取組みのうち、1年次に実施される自己発見レポート（コンピテンシー診断）は、皆さんが現在に至るまでに、自己の内に形成してきた様々な個性のうち、特に社会的な強みや弱み、行動や興味の特性などを測定し、自己理解を深めようというアセスメントです。具体的には【図5】に示す項目を測定し、学生支援システム K-SMAPYを通じて、皆さんにフィードバックをします。この結果は、皆さんが自分自身を振り返り、自己理解を深めるためのよりどころとなることでしょう。

自己コントロール力	対人関係	社会的な態度
<ul style="list-style-type: none"> <li>・意欲</li> <li>・自主性</li> <li>・適応力</li> <li>・自己統制力</li> <li>・ストレス耐性</li> <li>・持続力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・協調性</li> <li>・共感力</li> <li>・発信力</li> <li>・説得力</li> <li>・指導性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・創造的態度</li> <li>・現実的態度</li> <li>・情報収集力</li> <li>・論理性</li> <li>・規律性</li> <li>・国際性</li> <li>・IT適応力</li> </ul>

図5 自己発見レポート（コンピテンシー診断）の測定項目

自己理解を深める「自分史」作成は4年後のキャリアデザインにも大きな影響を与えるはずです。自己理解をもとに「自分史」を記す作業は、「自分とは何か、どこへ行くのか」という人生の普遍的な問いに対して答えを探すことにもなります。この意識改革によって、授業や課外活動に対する新たな希望や意欲が生まれ、大学生活全般において積極性が高まることが期待されています。ぜひ「自分史」の作成にチャレンジしてみてください。

## 6 終わりに

本章では、大学4年間を無為に過ごすことなく、自己認識や目的意識をもってキャリア形成や能力開発を行っていくことが重要であると述べてきました。主として職業上の能力としてのキャリアについて言及してきましたが、皆さんは安定した職業に就くためだけに大学へ入学されたのではないと思います。たとえ第一志望の大学ではなかったにせよ、大学生活は宝の山であることは間違いありません。一生の師や友人、なかには生涯の伴侶にめぐりあう人もいることでしょう。大学の4年間は、ライフデザインとしてのキャリアにも、きっと大きな影響を与えることが待ち受けているはずです。積極的にいろいろなことにチャレンジしましょう。

なお、全ての教職員は皆さんのライフデザイン・キャリアデザインが共に実りあるものとなることを願っています。迷ったときや弱気になったときは、友人や両親のほかにも、教員・職員も皆さんを後押しする存在であることを思い出してください。授業では少し怖そうにみえる先生も、キャリアサポート課や教務課の職員もきっと親身に話を聴いてくれるに違いありません。

【参考資料】 社会人基礎力の能力要素

2006年2月経済産業省「社会人基礎力に関する研究会」報告書より

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力 例) 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む。
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力 例) 「やろうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かしていく。
	実行力	目的を設定し確実に行動する力 例) 言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む。
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 例) 目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する。
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 例) 課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のものは何か」を検討し、それに向けた準備をする。
	創造力	新しい価値を生み出す力 例) 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える。
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 例) 自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらおうように的確に伝える。
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力 例) 相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 例) 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する。
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 例) チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する。
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力 例) 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する。
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力 例) ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。

# 第8章 教育開発推進機構による教育力向上の支援と修学サポート

## 1 教育開発推進機構とは

今日大学は、ハイレベルな「研究」機関であることはもちろん、学生のニーズに合った教育を提供し、社会人としての基礎力を身につけた有為な人材として社会に送り出す「教育」機関としての役割を果たすことが強く求められています。

そのためには、教職員が「教育」に対して持てる力をいかに発揮するか、新たな社会的ニーズに対応する教員の能力をどのように開発するか、さらに、それをいかに授業や指導へと活かしていくか、ということに対する工夫と努力が問われることになります。

國學院大學はこうした世の中の流れに応え、良質な教育・学修を学生の皆さんへ提供する「教育力」の一層の充実を目指して、平成21年4月に「教育開発推進機構」を設立しました。教育開発センター・共通教育センター・学修支援センターの3つのセンターで構成され、各学部などと協力しながら、教育に関するさまざまな事業を展開してゆきます。

## 2 教育開発センター

大学に課された大きな課題の一つに、教員の授業・学生指導に対する能力を向上させる活動＝FD（ファカルティ・ディベロップメント）の活性化があります。大学教員は専門の研究のほかに、どうしたら学生の皆さんにより良い教育が提供できるか、ということを考え、勉強しているのです。教育開発センターは、こうした教員の努力を支援するとともに、効果的な授業を行うためのさまざまな事業を企画・実行し、教育力向上を目指します。

## 3 共通教育センター

大学では専門的な知識を身につけるためのさまざまな科目を受講します。しかし、現代社会では、専門的な知識ばかりでなく、自国の歴史や文化、社会や世界に対する関心と、その一員として積極的にかかわってゆこうとする意欲を持った人材が求められています。たとえば外国語や自然科学、スポーツやパソコンのスキルなど、幅広い知識・教養・技術を身につけることが一層大切になるでしょう。また、就職のために資格を必要とする職業がいくつもあります。こうした幅広い教養修得や、資格取得などを支援するため、本学に

は、学部学科にかかわらず履修できる「教養総合」や「資格課程」などの「全学共通科目」が設けられています。共通教育センターでは、これら「全学共通科目」を、より学生や社会のニーズにあったものとして提供してゆくための調査・研究を行っています。

## 4 学修支援センター

大学での「学修」とは、単に先生に勉強を習い学ぶ「学習」だけではなく、より一層みずから強い意志をもって自立的・主体的に学び、「修める」というものです。この「学修」によって、社会に出て生きていくための力を養うことが学生生活における大きな目標の一つとなります。しかし、そうした「学修」のスキルを修得するためには、毎回の授業の予習や復習はもちろんのこと、自分自身にマッチした効率的な自習方法を探すことなど、さまざまな努力が必要になってきます。そして、その努力の過程でつまずいてしまうと、その「小さなつまずき」が、「授業について行けない…」などといった大きな悩みのもとになる場合があります。

そこで学修支援センターでは、学生の皆さんが卒業後に社会人として自立していくための「学修」をサポートする上での、必要な事例やデータの収集と分析などを進めています。

また、皆さんがつまずいてしまったことによって生じた「修学上の悩み」を少しでも解消できるよう「学修支援センター相談室」を設け、専任の教職員が学修に関する相談を受け付け、一緒に考え、アドバイスをを行っています。

## 5 ランゲージ・ラーニング・センター (LLC)

外国語力を身につけることは、大学での重要な目標のひとつです。LLCは皆さんの自主的な外国語学修を課外から支援する場所です。語学の修得には、知識を学ぶことに加え、そうした知識を実際に運用できるようになるための練習を行うことが大切です。26年秋にたまプラーザキャンパスに開室したLLC YOKOHAMA OFFICEでは、英語を中心とした学修サポートを行っており、パソコンを使ってオンライン教材の学修、英語の本の講読、グループでの英会話練習などが可能です。また、言語の修得プロセスや方法には様々な要因があるため、そうした学修活動を行う上で想定される色々な問題を、LLCでは「外国語学修相談」という形で対応しています。英語は渋谷とたまプラーザの両キャンパスで、中国語は渋谷キャンパスで、英語の専門教員や中国語の担当教員によるアドバイジングが受けられます。TOEIC, TOEFLを始めとする外国語検定試験も行いますので、ぜひチャレンジしてください。

## 学修支援センター相談室

学修支援センター相談室では、専任の教職員スタッフが常時在室しており、

- 進級・履修に関して確認したいんだけど…？
- 自習の仕方ってどうすればいいんだろう…？
- 授業の事を質問したいんだけど、どこに行けばいいの？
- より進んだ専門性の高い知識を身につけたいんだけど…？
- 今の勉強方法で大丈夫かな？

など、学生の皆さんの「学修」に関する悩みについての相談を受け、どうしたらよいかを一緒に考えます。また、専門的な知識やスキルが必要になる場合は各学部や担当セクションなどと連絡をとったりするなど、問題解決のためのサポートを通して、学生の皆さんがより順調に学修を進めて行けるよう、“あと押し”を行っています。あれっ？ と思ったら、まずは行ってみましょう。

**【開室時間】** 月曜日～金曜日 10:00～18:00 (12:50～13:50 昼休み)

※祝日および大学休業日は除く。

※夏季・冬季・春季休暇期間は変更がありますので、HP上で確認してください。

**【場所】** 渋谷キャンパス 3号館 3階 (3306)

**【電話番号】** 03-5466-6743

**【HP】** <http://www.kokugakuin.ac.jp/iatl/kyoumu0800009.html>

## 國學院大學ボランティアステーション

ボランティアステーションは主に以下の事業を行います。ボランティアに興味がある方、ボランティア活動をしてみたいという方、お気軽に相談しにきてください。

- (1) 國學院大學が企画・運営するボランティア活動への支援
- (2) 学外団体から依頼されるボランティア情報の発信
- (3) 学内ワークスタディ情報の発信
- (4) その他ボランティア活動への支援を行うために必要なこと

### 【ボランティア活動内容】

- 学内ボランティア…大学が主催・募集をしているボランティア活動です。
- スタディツアー…東北地域で行う宿泊タイプの体験ボランティアプログラムです。
- 学外ボランティア…ボランティアに興味をもったら、まずはボランティアステーションにいらしてください。一人ひとりに希望を聞きながら、アドバイスやボランティア活動の紹介、資料提供をします。
- 学内ワークスタディ…大学内で学生や授業のサポートを行います。
- ボランティアサークル…ボランティアに関わる大学公認サークルを紹介します。



**【開室時間】** 月曜日～金曜日（10:00～18:00） 祝日および大学休業日は除く

※昼休み（12:50～13:50）は閉室

※夏季・冬季・春季休暇期間は、変更があります。その都度別途ご案内します。

**【電話番号】** 03-5466-6698 **【メールアドレス】** volunteer@kokugakuin.ac.jp

**【場所】** 渋谷キャンパス3号館3階（3306）

## LLC YOKOHAMA OFFICE ●

ここでは、英語を中心とした外国語の学修支援を行います。様々な英語の本や雑誌を読んだり、英語のビデオを見たり、英会話やプレゼンテーションの練習を行ったりすることができます。自由に使えるコンピューター8台も備え、オンライン学習ツール NetAcademy 2\* による学修も可能です。英語教育専門の教員と、優しいスタッフが皆さんの英語自主学修のお手伝いをします。

**【開室場所】** たまプラーザキャンパス1号館304教室

**【開室時間】** 月・火・木・金曜日（10:00～18:00） 祝日及び大学休業日は除く

※夏季・冬季休暇期間は、変更があります。詳しくはホームページをご覧ください。

\*登録料千円で、英語、TOEIC、中国語などの学修が在学中ずっと可能です。

## 外国語学修相談 ●

外国語の専門教員が相談に対応します。例えば…

- TOEIC<sup>®</sup> や TOEFL、HSK、中国語検定などの試験勉強の仕方がわからない
- 留学に向けて自主的に勉強したいがどうしたらいい
- 自分なりに更に進んだ外国語学修がしたい
- 英語や中国語の自主学修の仕方に不安がある

### 【受付時間と場所】

#### ○英語学修相談

LLC YOKOHAMA OFFICE 月・木曜日 10:30～17:30

渋谷 ボランティアステーション内（3号館3306） 水曜日 随時（要予約）

#### ○中国語学修相談

渋谷 ボランティアステーション内（3号館3306） 月・木曜日 随時（要予約）

※外国語学修相談はウェブサイトの相談予約システムから予約をするか、電話・来室の上予約してください。

※夏季・冬季休暇期間は、変更があります。詳しくはホームページをご覧ください。

## 第9章 SNS (ソーシャル・ネットワーク・サービス) との上手なつきあい方 —トラブル・事件を避けるために—

Twitter (ツイッター)、Facebook (フェイスブック)、LINE (ライン)、mixi (ミクシイ) ……、これらのSNS (ソーシャル・ネットワーク・サービス) の名前を聞かない日は、今やほぼなくなりました。皆さんの中にも、これらのSNSを利用している人が多いかと思いますが。友人との会話や、いま何しているかのつぶやき、その日あったことの日記など、かつての電話や、直接会っての会話が、今やSNSに取って代わられて来つつあります。

SNSはとても便利なコミュニティ・ツールであり、時間や場所を選ばずに他人とやり取りが可能です。ですが、その便利さ・手軽さゆえ、従来は考えられなかったトラブルが次々に発生しているのもまた事実です。例えば、最近起きたSNS関連の事件を、いくつか挙げてみましょう。

- アルバイト先の飲食店キッチン内で、食材の上に寝転んだり、食器洗浄機の中に入り込んだりする悪ふざけの写真をTwitterで投稿して、その店の営業が停止になった。
- テーマパークのアトラクションから飛び降りたり、園内の機材を破損させたりする様子の写真をTwitterやFacebookに投稿し、損害賠償を請求された。
- LINEでの会話が段々口論にエスカレートし、ついには口論相手の殺害に至った。

これらを極端な例と考え、「自分とは関係ない」と思うことは簡単です。しかし、このような事件が後を絶たないというのは、SNSを使用する人々のどこかに、「自分とは関係ない」という気持ちがあり、人ごとのように思っているからに他なりません。

上記のような事件を起こした人は、必ずこのように言うそうです。

まさか、こんな大ごとになるとは思わなかった

この言葉が、まさにSNSでの事件の本質を物語っています。SNSは基本的に友人や仲間との会話ツールですが、同時にインターネットの世界に直結しています。つまり、仲

間内だけで会話しているつもりが、その内容はすべて全世界に発信されているのです。この事を忘れると、自分たちだけで楽しんでいたつもりが悪ふざけが、あっという間に世界中に広まって行き、気が付いた時には自分の力ではどうすることもできない位に大ごとになってしまっているのです。

一度大ごとになってしまったつぶやきや投稿は、その内容を消去してもコピーが世界中を流れます。その速度は驚くほど速く、例えば Twitter のリツイート（他のユーザーの発言を転載すること。また、転載した発言。）などは、一晩で数千から数万件に至ることもあり、こうなると完全に自分の手には負えなくなります。そして、自分の手を離れたツイートや投稿から、今度はかつて別のサイトに投稿した自分の住所、所属する学校やサークル、はては家族の名前といった個人情報が二次的に探られるケースが少なくありません。このような現象を「炎上」などと呼んだりしますが、この「炎上」で被害にあうのは、自分だけではありません。前述の通り、家族や所属学校にひっきりなしに電話が掛かってくるケースも多く、結果的に引っ越しを余儀なくされるケースも発生しています。

では、この「炎上」は、どのように防ぐべきでしょうか。繰り返しになりますが、一度「炎上」してしまうと、残念ながら対処する方法はありません。つまり、「炎上」する前に、自分のつぶやきや投稿を、きちんと吟味するしか防止する方法はないのです。幸い、皆さんは大学に入学するだけの学力と知識を持った、優秀な人たちです。前述のような軽率なつぶやきや投稿で人生を棒に振ることはないものと思いますが、それでもつぶやく前に一度立ち止まる習慣をつけてほしいと願っています。

SNS はとても便利なツールです。そして、この便利なツールを生かすも殺すも、自分の使い方次第です。SNS の影響力を軽視してはいけません。しかし、いたずらに SNS を恐れてもいけません。

tweet ボタンを押すその前に 投稿ボタンを押すその前に  
果たしてこの内容が、世界に流れて問題はないのか

を、もう一度考えましょう。

# 新入生のための用語集

## 索引

(アイウエオ順)

**アカデミック・モラル** 大学生活で守るべき倫理規範。出席リーダーの不正利用、喫煙場所以外の喫煙、迷惑駐輪、インターネットからの剽窃・盗用の著作権侵害など、学生として守らなければならないモラル。

**アカデミック・リテラシー** 大学でどのように学ぶかの方法やスキルを説明した講義や文書・パンフレット。

**ISO27001取得** アイエスオーニマンナナセンイチ 学生の個人情報を取り扱う部署を中心に、ISO27001国際規格((財)日本情報処理開発協会が発行する情報セキュリティマネジメント適合性評価制度と英国の認定機関であるUKASが発行する規格)を平成18年1月に取得。個人情報の取り扱いについては、厳密な基準に従って事務がなされている。

**FD** エフ ディ 「Faculty Development」の略。大学の教育環境や授業改善を大学の教員組織全体で取り組む活動。授業公開・授業アンケート・各種研修などからなる。

**エルダー・サポーター** ガイダンスや相談会開催の際に、その補助に当たる2年次生以上の学生。新入生にとって、気軽に相談できる先輩。

**演習・ゼミナール** 特定の研究課題に対して、教員の指導のもと参加者が調査分析し、独自に資料・レジメを作成して発表する形式の授業。

**オフィス・アワー** 各教員が授業以外で研究室に在室し、授業や就学上の相談をうけつける時間帯。できるだけ直接予約するか、e-Mailで予約してからでかけたい。

**学年暦** 大学の一年間の予定行事・授業期間・試験期間・休暇期間などが定められた暦。

**教養総合** 國學院大学における教養教育をになう科目を「教養総合」と呼ぶ。共通科目・主題講座・教養演習・総合講座・総合演習などからなる。

**KEAN** キーン 國學院大学情報ネットワークの総称。

学内でパソコン利用、電子メール、学外からのアクセス、K-SMAPYの利用など、各種サービスの基盤となっている。

**K-aiser** カイザー 本学のOPAC(蔵書検索システム)。学内外からの利用が可能である。図書館所蔵資料に限らず、資料室・研究室等全所蔵が検索対象である。

**K-PIT** ケイピット 学生個人の就学上の情報を読み取る機械。学生証をかざすだけで、その日の授業教室、休講情報、大学からのお知らせなどを知ることができる。

**K-SMAPY** ケイスマッピー 平成14年度より稼働しているWebを利用した学生のための学生支援システム。履修登録、休講情報、教材参照、授業のお知らせ機能などの学修支援のほかに、キャリアサポート、課外活動支援等、多様な機能を有する。KEANのアカウントとパスが必要。

**講義** 基本的に教員が教場で発話や板書、資料、プロジェクターなどを使用して展開する授業。クラス規模が比較的大きく、受講者は自分でノートをとりながら講義の内容を理解する。

**サマー・セッション** 夏休み期間中を利用して開講する集中講義授業。3クール用意されており、1クール4日間の集中講義で「セメスター科目」分の単位が取得できる。

**試験** 授業を受けたあとにその履修結果として教員が評価をするよりどころとなるテスト。授業時試験と定期試験期間中に行うものがある。合格点は60点以上である。

**シラバス(講義概要)** それぞれの授業の目的、内容、計画、評価基準、使用テキストなどをしめたもの。現在はWeb上で見ることができ、科目の概要は冊子でも提供される。

**GPA** ジイポイントイ 「Grade Point Average」の略。修得した単位の総計ではなく、1単位ごとの加重平均を客観的に示した数値。年間GPAと累積GPAがある。修学相談や奨学金受給等の際に指標となる。

その計算式は、「履修要綱」にある。

**時間割** 毎年4月に、当年度開講される全科目の時間割の一覧と、全学・学部学科別の諸注意を所載した冊子が配布される。

**事前登録** 授業科目の中には、教育効果を高めるために「少人数教育」を実施し、そのため本登録期間の前に登録を締め切り、既定の人数を上回った場合は、コンピュータによる自動抽選を行う。

**実習** 実際の作業や実験・観察・見学などを通して、知見を深める授業形式。

**修学相談** 学生に対する修学上の相談。基本的に1年前期修了時・1年後期修了時に、修得単位およびGPAにより、留年・卒業延期のおそれのある学生に対して実施する。

**出席リーダー** 授業が行われる教室の設置された出席自動読み取り機械。授業を受ける際に、あらかじめ学生証をリーダーにかざすことで、出席がカウントされる。

**進級条件** 2年次から3年次に進級する場合に、学則、履修要綱及び各学部が定めている要件を満たさなければならない。失敗すると2年次に留まることになり、卒業が年度単位で遅れることになる。

**スプリング・セッション** 春休み期間中を利用して開講する集中授業。1クール用意されており、4日間の集中講義で「セメスター科目」分の単位が取得できる。

**セメスター** いわゆる一年かけて履修するものを「通年科目」と呼び、前期・後期で履修する科目を「セメスター科目」と呼ぶ。このほかに、「サマー・セッション」「スプリング・セッション」がある。

**選択科目** 必修科目以外の、基本的に学生の希望や志向に沿った自由な選択ができる科目。自分が何を学びたいか、どんな勉強がしたいか、を意識して体系的な履修を心がけたい。

**卒業** 学則、履修要綱及び各学部学科が定めてい

る所定の要件をすべて満たす必要がある。

**単位** 授業時数に応じて与えられる数値。科目ごとに異なる。卒業に必要な単位は、124単位。進級制限や卒業の基準となる。年次別履修制限単体内での履修が義務づけられる。

**単位互換** 大学が協定している他大学間との相互の単位認定制度。首都圏西部地区単位互換協定および横浜市学術交流協定によるものがある。

**年次別履修単位制限** 学年ごとに定められた一年間で履修できる上限単位。資格課程を受講する学生は、この制限外で履修する。

**必修科目** 所属する学部学科で求められる必修科目と、全学生に求められる必修科目がある。これらを欠いては、進級や卒業ができない。

**副専攻** 自分が所属する学部学科を主専攻と呼び、それ以外に、希望に従って1つの「副専攻」を履修することができる。必要単位の修得が済めば、認定証が授与される。履修要綱参照。

**履修に関する説明会** 履修要綱に基づいて、学修の進め方、科目の履修方法について説明を行うガイダンス。

**履修登録** 入学した学生がもっとも注意しなければならない新学期当初の手続き。必修科目選択科目資格取得の有無を確認し、年次別履修制限単体に留意して登録する。一年の生活のリズムがこれによって決まる。履修登録は後期にもある。すべての手続きはK-SMAPYを通して行う。

**履修要綱** 履修すべき単位数や授業形態、試験方法、評価基準、資格取得、などの学生が従うべき基準を記した冊子。4年間の指針となる。入学時に配布し、卒業まで使用する。再配布はしない。

**若木育成会** 昭和23年3月に「父兄会」として発足し、その後昭和46年に「國學院大學父兄会」と改め、平成9年5月から「國學院大學若木育成会」と改称し現在に至る、学生の保護者の会である。保護者には、年一回、5月中旬に、履修科目及び成績の一覧を送付・報告している。